鳥取大学附属図書館

円護寺古墳群

市道円護寺覚寺線整備事業に係る
円護寺5・6・7・8・40・41・42号墳発掘調査報告書

0050277730

2002. 3

財団法人　鳥取市文化財団

円護寺古墳群

市道円護寺覚寺線整備事業に係る
円護寺5・6・7・8・40・41・42号墳発掘調査報告書

2002. 3

財団法人　鳥取市文化財団

鳥取市文化財団
氏寄贈

序　　文

鳥取市は、海・山・大砂丘など豊かな自然環境にめぐまれた山陰東部の中核都市として発展してまいりました。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめ、その周辺丘陵に古墳・集落跡などの原始・古代の足跡を知ることができる遺跡が数多く存在しています。

これらの埋蔵文化財は、その地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産となるものです。

このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の指導を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めているところです。

さて、今回の円護寺古墳群の調査は、鳥取市が進めている道路整備事業に係る発掘調査として、平成11年度から行ってまいりました。

調査の結果、古墳時代後期の古墳とともに、当時の様子を知る数多くの貴重な史料を得、ここに報告書発刊のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係各位の利用に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導いただいた関係各位の方々に心から感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　西尾迢富

例　　言

1．本報告書は、市道円護寺覚寺線整備事業に伴って実施した円護寺（えんごじ）古墳群の発掘調査報告書である。
2．本発掘調査は、鳥取市の委託を受けて、平成11年度は財団法人 鳥取市教育福祉振興会 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成12、13年度は財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが実施した。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市円護寺698−2ほかである。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．本報告書の執筆・編集は主として前田均、神谷伊鈴があたり、出土遺物観察表は杉谷美恵子が作成した。
6．現地航空写真撮影は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7．発掘調査事業にあたっては、多くの方々から指導、助言ならびに協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取県住宅供給公社、中野知照
（順不同　敬称略）

凡　　例

1．本報告書に用いた方位は磁北を示し、レベルは海抜標高である。
2．調査によって出土した遺物には、調査年度、遺跡名、遺構名、遺物番号（遺物台帳登録番号）、取上げ年月日を注記した。

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第１章　発掘調査の経緯

　１　発掘調査の経過……1

　２　発掘調査の組織・体制……2

第２章　遺跡の位置と歴史的環境……3

第３章　調査の結果

　第１節　円護寺古墳群の立地と構成……5

　第２節　古墳の調査……5

　　１　円護寺５号墳……8

　　２　円護寺６号墳……20

　　３　円護寺７号墳……25

　　４　円護寺８号墳……30

　　５　円護寺40号墳……41

　　６　円護寺41号墳……44

　　７　円護寺42号墳……50

　第３節　まとめ……56

　出土遺物観察表……59

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　円護寺古墳群 周辺遺跡分布図 ……4
第２図　円護寺古墳群 分布図（Ｓ＝１：5000）……6
第３図　円護寺５号墳 地形実測図 ……9
第４図　円護寺５号墳 墳丘遺存図 ……9
第５図　円護寺５号墳 墳丘断面実測図 ……10
第６図　円護寺５号墳 主体部実測図(1) ……11・12
第７図　円護寺５号墳 主体部実測図(2) ……13・14
第８図　集石遺構実測図……15
第９図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図(1) ……16
第10図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図(2) ……17
第11図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図(3) ……18
第12図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図(4) ……19
第13図　円護寺５号墳 出土遺物実測図 ……19
第14図　円護寺５号墳 表土中出土遺物拓影 ……20
第15図　円護寺６・７号墳 地形実測図 ……21
第16図　円護寺６号墳 墳丘断面実測図 ……22
第17図　円護寺６号墳 主体部実測図 ……23・24
第18図　円護寺６号墳 主体部出土遺物実測図 ……25
第19図　円護寺６・７号墳 墳丘遺存図 ……26
第20図　円護寺７号墳 主体部実測図 ……27・28
第21図　円護寺７号墳 墳丘断面実測図 ……29
第22図　円護寺７号墳 出土遺物実測図 ……30
第23図　円護寺７号墳 表土中出土遺物拓影 ……30
第24図　円護寺８・40号墳 地形実測図 ……32
第25図　円護寺８号墳 墳丘遺存図 ……32
第26図　円護寺８・40号墳 墳丘断面実測図 ……33・34
第27図　円護寺８号墳 第１主体部実測図 ……35・36
第28図　円護寺８号墳 第２主体部実測図 ……37
第29図　円護寺８号墳 第１主体部出土遺物実測図(1) …38
第30図　円護寺８号墳 第１主体部出土遺物実測図(2) …39
第31図　円護寺８号墳 第２主体部出土遺物実測図 ……39
第32図　円護寺８号墳 出土遺物実測図 ……40
第33図　溝状遺構実測図……41
第34図　円護寺40号墳 墳丘遺存図 ……42
第35図　円護寺40号墳 主体部出土遺物実測図 ……42
第36図　円護寺40号墳 主体部実測図 ……43
第37図　円護寺41号墳 主体部出土遺物実測図 ……44
第38図　円護寺41・42号墳 地形実測図 ……45
第39図　円護寺41号墳 墳丘断面実測図 ……46
第40図　円護寺41号墳 主体部実測図 ……47・48
第41図　円護寺41・42号墳 墳丘遺存図 ……49
第42図　円護寺42号墳 主体部実測図 ……51・52
第43図　円護寺42号墳 墳丘断面実測図 ……53
第44図　円護寺42号墳 主体部出土遺物実測図(1) ……54
第45図　円護寺42号墳 主体部出土遺物実測図(2) ……55
第46図　円護寺42号墳 出土遺物実測図 ……55

図版目次

図版１　円護寺古墳群遠景（西から）
　　円護寺古墳群周辺航空写真（南東上空から）
図版２　５・６・７号墳全景（航空写真）
　　５号墳全景（航空写真）
図版３　５号墳墳丘検出状況（北東から）
　　５号墳主体部 石棺蓋検出状況（北東から）
　　５号墳主体部 石棺内遺物検出状況（南西から）
図版４　５号墳主体部 石棺検出状況（南西から）
　　５号墳主体部 石棺内遺物出土状況（北西から）
　　５号墳主体部 石棺内遺物出土状況（東から）
図版５　集石遺構検出状況（北東から）
　　６・７号墳全景（航空写真）
　　６号墳調査前（北から）
図版６　６号墳墳丘検出状況（東から）
　　６号墳主体部 石棺蓋検出状況（西から）
　　６号墳主体部 石棺検出状況（東から）
図版７　６号墳主体部 石棺検出状況（北から）
　　６号墳主体部 石棺取上後（東から）
　　６号墳主体部 石棺内遺物出土状況（北から）
図版８　７号墳調査前（南西から）
　　７号墳墳丘検出状況（北西から）
　　７号墳周溝埋土状況（南東から）
図版９　７号墳主体部埋土状況（北西から）
　　７号墳主体部検出状況（南西から）
　　７号墳主体部検出状況（北西から）
図版10　８号墳調査前（北東から）
　　８号墳墳丘検出状況（北東から）
　　８号墳墳丘断面（南東から）
図版11　８号墳墳丘断面（北西から）
　　８号墳第１主体部検出状況（南東から）
　　８号墳第１主体部埋土状況（北西から）
図版12　８号墳第１主体部遺物出土状況（北東から）
　　８号墳第１主体部遺物出土状況（北東から）
　　８号墳第２主体部検出状況（北西から）
図版13　８号墳第２主体部埋土状況（南東から）
　　８号墳第２主体部遺物出土状況（南東から）
　　40号墳墳丘検出状況（東から）
図版14　40号墳墳丘検出状況（南から）
　　40号墳主体部埋土状況（南から）
　　40号墳主体部検出状況（南から）
図版15　40号墳主体部遺物出土状況（北から）
　　41・42号墳検出状況（北東から）
　　41号墳調査前（東から）
図版16　41号墳周溝埋土状況（南西から）
　　41号墳墳丘検出状況（南から）
　　41号墳主体部 石棺検出状況（東から）
図版17　41号墳主体部 石棺取上後（西から）
　　42号墳墳丘検出状況（東から）
　　42号墳主体部検出状況（南東から）
図版18　42号墳主体部遺物出土状況（南西から）
　　42号墳主体部遺物出土状況（北西から）
　　42号墳主体部遺物出土状況（北西から）
図版19　５号墳出土遺物
図版20　５号墳出土遺物
図版21　５号墳出土遺物
図版22　６号墳出土遺物
　　８号墳出土遺物
図版23　８号墳出土遺物
　　40号墳出土遺物
図版24　40号墳出土遺物
　　41号墳出土遺物
　　42号墳出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

１　発掘調査の経過

円護寺古墳群は、鳥取市円護寺地内に所在し、標高60～107mあまりの丘陵に営まれている。この丘陵上には数多くの古墳が築かれていることが知られており、昭和57年には宅地開発に伴って古墳10基の発掘調査が行われた。

古墳群が立地する円護寺周辺は、自然の残るのどかな地域であったが、宅地の開発事業が進められ住宅地として大きく変貌してきている。今回の発掘調査は、これらの事業の一環として計画された道路整備事業に伴って実施したものである。

道路整備事業が具体的に示されたのは平成９年度である。整備計画の事前協議を受けた鳥取市教育委員会では、事業計画地内の踏査を行うと同時に試掘調査を実施した。試掘調査は９年度に行われ、その結果、事業地内に古墳が存在することが明らかになった。調査結果をもとに、遺跡の取扱いについて関係機関と協議を行ったが、現状での保護、保存は難しく記録保存で対応することとなった。

発掘調査は、鳥取市から委託を受け、平成11年度は㈶鳥取市教育福祉振興会が、平成12、13年度には㈶鳥取市文化財団が行った。

平成11年度の調査は、円護寺５号墳、８号墳、40号墳を対象とし、８、40号墳の現地調査を同年４月～８月に、５号墳の調査は平成12年３月に行った。

８号墳の調査は、発掘資材の整備、搬入などの調査準備後の４月27日から開始した。まず、立木の伐採と整理を行い、測量杭の設置ののち現況の地形測量を実施した。地形測量後ただちに表土除去作業に入り、引き続き墳丘の検出を行ったが、８号墳の東側に小規模な古墳が築かれていることが明らかとなり、この古墳について40号墳の名称をあたえた。６月中旬から埋葬施設の調査に入ったが、その検出には大変苦慮した。繰り返し精査を行ったが平面的に検出することができず、トレンチを設定して確認する結果となった。検出の結果、８号墳から２基、40号墳から１基の埋葬施設とともに須恵器や鉄刀、鉄鏃などの副葬品が出土し、古墳時代後期の古墳であることが明らかになった。現地調査は８月上旬に終了した。調査面積は約252㎡である。

５号墳の調査は平成12年２月に着手した。調査準備、立木の整理が完了後ただちに表土除去作業を開始したが、墳頂部で石材が確認され石棺が納められていることが予想された。検出の結果、蓋石が完存する良好な状態で石棺が検出され、棺内から多数の須恵器、玉類、鉄鏃などが出土した。現地調査は３月末に終了した。調査面積は約237㎡である。

平成12年度の調査は、８号墳東側の緩斜面に築かれた41、42号墳を対象に行った。調査は発掘資材の整備、搬入などの調査準備後の４月20日から開始した。伐採木の整理後、測量杭の設置と現況の地形測量を実施した。表土除去作業は42号墳から随時進め、引き続き周溝と墳丘面の検出を行った。墳丘の遺存状況を測量した後、埋葬施設の検出作業に入り、41号墳から石棺１基、42号墳から墓壙１基を検出した。42号墳の墓壙内からは長さ１mを超える鉄刀や赤彩された土師器高杯の他、多数の玉類などの副葬品が出土した。最後に墳丘の築造状況について調査を行い、６月６日に現地調査を終了した。調査面積は約411㎡である。

平成13年度の調査は、６号墳と７号墳について行った。調査は４月４日から開始し、測量杭の設置ののち現況の地形測量を行い、表土除去作業と墳丘の検出作業を開始した。墳丘検出の後、埋葬施設の検出作業を実施し、６号墳から石棺１基、７号墳から墓壙１基を確認した。６号墳の石棺内から須恵器蓋杯の転用枕が出土し、古墳時代後期の古墳であることが明らかになった。最後に墳丘築造状況の調査を行い、５月21日に現地調査を終了した。調査面積は約540㎡である。

３年次にわたった発掘調査の報告書作成は、平成13年11月から平成14年３月に行った。

2　調査の組織・体制

発掘調査の組織・体制は以下のとおりである。

平成11年度

調査主体　財団法人　鳥取市教育福祉振興会
理事長　西尾迢富(鳥取市長)
副理事長　藤原繁義
岸本晟
常務理事　田村章三
事務局長　田中和夫

調査指導　鳥取市教育委員会　文化課

事務局　財団法人　鳥取市教育福祉振興会　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　平木一義(鳥取市教育委員会文化課長)
副所長　加藤卓美
調査事務　秋田澄世

調査担当　財団法人　鳥取市教育福祉振興会　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調査員　山田真宏
藤本隆之
調査補助員　神谷伊鈴
杉本利子
小杉雄貴

平成12年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理事長　西尾迢富(鳥取市長)
副理事長　本多達郎
米澤秀介
常務理事　田中哲夫
事務局長　小杉宗雄

調査指導　鳥取市教育委員会　文化課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　藤井博
副所長　加藤卓美
調査事務　秋田澄世
白岩千足

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調査員　前田均
調査補助員　神谷伊鈴
杉本利子

平成13年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理事長　西尾迢富(鳥取市長)
副理事長　伊藤憲男
米澤秀介
常務理事　田中哲夫
事務局長　小谷荘太郎

調査指導　鳥取市教育委員会　文化課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　藤井博
副所長　加藤卓美
調査事務　秋田澄世
白岩千足
水戸口直美

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調査員　前田均
調査補助員　神谷伊鈴
岡本大輔
下多みゆき

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は、面積237.25㎢、人口15万人余を擁する山陰の中核都市として、また、県庁所在地として政治、経済、文化の中心的な役割を担っている。鳥取市の北側は鳥取砂丘をへて日本海が広がり、他の三方は中国山脈から続く山地によって囲まれている。市の中央部には南から北へと千代川が流れ、市域の中心はこの千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めている。肥沃な鳥取平野は、古代から重要な生活基盤として人々の生活を支え、政治・経済・文化・交通の要地としての位置をしめてきた。このような地理的条件を背景として鳥取市内には数多くの遺跡が存在している。

円護寺古墳群は、JR鳥取駅から北へ約3.0kmに位置する円護寺地区の丘陵上に立地している。丘陵の北側には谷合に形成された平野が開け、この平野部からは古代の人々の足跡が明らかになってきている。以下、周辺遺跡について概記する。

縄文時代　縄文時代中期の遺跡には浜坂砂丘の旧千代川東岸部に立地する栃木山遺跡、追後遺跡があげられる。後・晩期の遺跡については周辺でみることはできないが、千代川右岸には大路川遺跡、西大路土居遺跡、古市遺跡、宮長竹ヶ鼻遺跡があり、同遺跡からは晩期突帯文土器が出土している。また、千代川左岸の遺跡であるが、古海遺跡、山ヶ鼻遺跡、岩吉遺跡からも後期、晩期の土器が検出されている。

弥生時代　代表的な弥生時代の遺跡として、岩吉遺跡、秋里遺跡、西大路土居遺跡などがある。岩吉遺跡は、中期から後期の掘立柱建物跡や後期の水田跡が検出され、鳥取平野における弥生集落の存在を考えるうえで重要な遺跡として注目されている。また、西大路土居遺跡では、前期から後期にかけて遺構や、搬入土器を含む大量の土器や銅剣が出土し、他地域との交流を示唆する貴重な遺跡となっている。秋里遺跡は古墳時代を中心とする祭祀遺跡として知られているが、近年の調査で弥生時代の遺構、遺物が検出され、弥生時代から中世にいたる大規模な複合遺跡であることが明らかになってきている。

古墳時代　古墳時代の集落遺跡として前述の秋里遺跡、岩吉遺跡、西大路土居遺跡、菖蒲遺跡、円護寺坂ノ下遺跡などがあげられる。岩吉遺跡では鉄滓、羽口、精錬鍛冶滓が出土しており、鉄器生産が行われた可能性が指摘されている。また、西大路土居遺跡、菖蒲遺跡、秋里遺跡では竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された。円護寺坂ノ下遺跡は平成９年度に実施した試掘調査で発見された遺跡である。その後、平成10、11年度に本格的な発掘調査が実施され、古墳時代後期に比定される竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝などの遺構が確認され集落遺跡として捉えられている。

周辺の古墳についてみると、覚寺古墳群、開地谷古墳群、雁金山古墳群、浜坂横穴、雁金山横穴などが知られている。覚寺古墳群は13基の古墳で構成されている。この内の７基については平成元年に調査が行われ、中期初頭、後期初頭、終末期の古墳であることが明らかになった。開地谷古墳群は浜坂砂丘の南東側丘陵に立地し、これまでに78基が確認されている。開地谷古墳群の調査はゴルフ場造成に伴い実施され、８基の古墳が検出された。埋葬施設にはいずれも箱式石棺を持ち、棺内から須恵器、土師器の他に鉄刀、鉄剣、鉄斧、鉄鏃、馬具類や多数の玉類が出土している。

歴史時代　歴史時代の周辺遺跡として円護寺坂ノ下遺跡があげられる。同遺跡からは中世の掘立柱建物跡、土坑、溝などの遺構のほか、13世紀前半とみられる鍛冶炉が５基検出された。鍛冶炉の周辺には掘立柱建物跡、土坑、溝などの遺構が隣接し、鋳型、羽口、鋳物片などが検出された。高度な技術を持った工人の組織的な携わりがうかがわれる遺跡として注目されている。

円護寺古墳群が立地する丘陵の南西には標高263mの久松山が位置している。この久松山山頂には鳥取城の天守閣が構えられ、その山腹には砦跡などの遺構が多く残っている。鳥取城は、天正９(1581)年に羽柴秀吉によって攻略されるが、久松山を取り囲む丘陵上にはその際の砦跡や土塁などの遺構が数多く残されており、現在その姿を見ることができる。

第１図　円護寺古墳群　周辺遺跡分布図

第３章　調査の結果

第１節　円護寺古墳群の立地と構成

円護寺古墳群は、鳥取市円護寺地内に所在し、円護寺集落の東側および西側丘陵上に展開している。古墳群が立地する丘陵は、標高250mあまりの本陣山から北西に延びる主稜線から派生した支稜にあたり、古墳群はこの丘陵の標高約50～107m地点に支群をもちながら築かれている。古墳群が展開する丘陵の前面には谷合に平野が開け、その中央を円護寺川が北西に流れている。円護寺川の左岸には円護寺坂ノ下遺跡が営まれており、平成10、11年度の調査によって古墳時代後期に比定される竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出され、集落跡が所在していたことが明らかになった。円護寺坂ノ下遺跡を望む東丘陵に展開する円護寺古墳群との関連が注目されるところである。

円護寺古墳群は、現在までに45基(円護寺１～19号墳、21～25号墳、27～47号墳)が確認されている。古墳の大半は円護寺川の右岸丘陵に集中し、小尾根単位にまとまりを見せるが、34～36号墳については左岸丘陵に位置し１支群をなしている。古墳群は、直径12m内外の小型円墳を主に構成されているが、これらの中で丘陵の先端頂部に位置する９、10号墳は、直径22m前後、高さ２m以上を測り、円護寺古墳群の中で最も大型の円墳となっている。また、古墳群の最高位となる標高107mには円護寺18号墳が築かれている。同古墳については前方後円墳として周知されているが、削平が著しく現状でその形を明確に捉えることができない。

円護寺古墳群を対象とした発掘調査は、宅地造成事業に伴い昭和57年度に行われ、円護寺４、19～29号墳を対象に調査がなされた。調査の結果、須恵器の蓋杯、高杯、壺、𤭯、提瓶、横瓶や鉄刀、鉄鏃、鉄斧などのほか、管玉、小玉、切子玉などの装身具が出土し、６世紀～７世紀初頭に築造された古墳であることが明らかになった。埋葬施設は４、19、21、22、23、27号墳から検出され、複数の埋葬施設をもつ４号墳や、墳丘周辺に多数の埋葬施設を有する23号墳などが見られる。埋葬形態は横穴式石室をもつ27号墳を除き、他はいずれも石棺を内部主体としており、埋葬施設として主に石棺を用いる傾向が見られる。今回調査した５、６、41号墳や同一丘陵上に立地する16、17号墳にも類似する石棺を見ることができる。

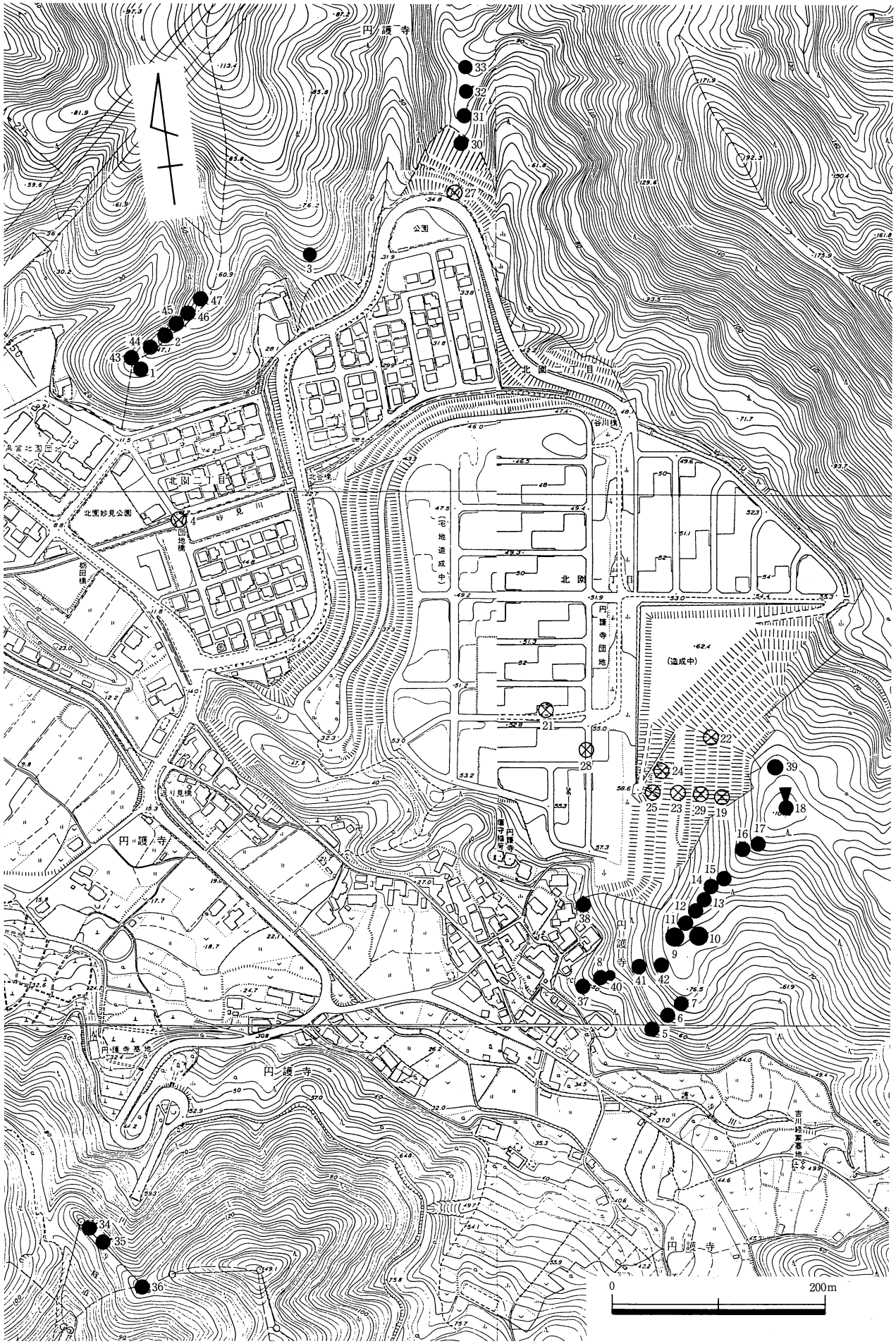
なお、昭和57年度の調査で計10基の古墳が検出されたが、20号墳と26号墳については調査によって古墳ではないことが明らかになっている。

円護寺37～42号墳は今回の発掘調査および分布調査によって新たに確認された古墳である。古墳番号の呼称について当初は、本報告の５、８号墳をそれぞれ39号墳、37号墳としていたが、再度行った分布調査の結果、両古墳が鳥取市遺跡分布地図２(鳥取県教育委員会)に示されている登録番号の2-175(円護寺５号墳)と2-178(円護寺８号墳)に該当するものとみられることから、本報告の段階で古墳名称を修正し報告していることを付記しておく。

第２節　古墳の調査

今回の調査地は、昭和57年度に実施された調査地の南側同一丘陵にあたる。丘陵上には尾根の最高位(標高107m)に位置する円護寺18号墳(前方後円墳)を初めとし、丘陵の先端に向かって18基の古墳が連続して築かれている。今回の調査は、この丘陵の先端部に位置する古墳を対象として行い、円護寺５、６、７、８、40、41、42号墳の計７基を検出した。

調査の結果、石棺(５、６、41号墳)、木棺直葬(７号墳)、直葬(８、40、42号墳)などの埋葬施設とともに須恵器(蓋杯、高杯、壺、甕、𤭯、提瓶)、土師器(高杯、椀)、鉄製品(刀、刀子、鏃)、玉類(切子玉、管玉、小玉、丸玉)など多数の副葬品が出土した。



第２図　円護寺古墳群分布図（Ｓ＝１：5000）

円護寺古墳群分布図対照表

番号	名　称	種類	規　模 (直径×高さ)m	埋葬施設	出　土　遺　物	備　　考	県番号
1	円護寺１号墳	円墳	12×1.2				2-171
2	２号墳	円墳	12×1.0				2-172
3	３号墳	円墳	12×0.5				2-173
4	４号墳	円墳	9.1×—	石棺	須恵器蓋杯 鉄鏃 刀子	昭和57年度調査　消滅	2-174
5	５号墳	円墳	11.4×3.2	石棺	須恵器蓋杯 瑯 提瓶 鉄鏃 刀子 玉	平成11年度調査　本報告	2-175
6	６号墳	円墳	7.3×1.8	石棺	須恵器蓋杯	平成13年度調査　本報告	2-176
7	７号墳	円墳	13.6×3.0	木棺直葬	須恵器蓋杯	平成13年度調査　本報告	2-177
8	８号墳	円墳	11.5×3.2	直葬	須恵器蓋杯 鉄刀 鉄鏃 刀子 土師器	平成11年度調査　本報告	2-178
9	９号墳	円墳	22×2.5				2-179
10	10号墳	円墳	22×2.0				2-180
11	11号墳	円墳	10×1.0			一部流失	2-181
12	12号墳	円墳	10×0.9			一部流失	2-182
13	13号墳	円墳	8 ×0.5			削平	2-183
14	14号墳	円墳	12×1.0			削平	2-184
15	15号墳	円墳	11×0.5			削平	2-185
16	16号墳	—	—	石棺		削平　石棺露出	2-186
17	17号墳	—	—	石棺		削平　石棺露出	2-187
18	18号墳	前方後円墳	—				2-188
19	19号墳	円墳	23×—	石棺	須恵器蓋杯 高杯 壺 鉄鏃 玉	昭和57年度調査　消滅	2-189
20	20号墳					昭和57年調査の結果古墳状隆起	
21	21号墳	円墳	7 ×—	石棺	須恵器蓋杯 高杯 壺 提瓶 鉄鏃 刀子	昭和57年度調査　消滅	2-190
22	22号墳	円墳	10×—	石棺		昭和57年度調査　消滅	2-191
23	23号墳	円墳	11.5×—	石棺	須恵器蓋杯 高杯 刀子	昭和57年度調査　消滅	2-192
24	24号墳	円墳	10×—			昭和57年度調査　消滅	2-193
25	25号墳	円墳	10×—		須恵器杯身	昭和57年度調査　消滅	2-194
26	26号墳					昭和57年調査の結果古墳状隆起	
27	27号墳	円墳	12×—	横穴式石室	須恵器蓋杯 高杯 提瓶 鉄鏃 鉄斧 玉	昭和57年度調査　消滅	2-195
28	28号墳	円墳	12.5×—			昭和57年度調査　消滅	2-196
29	29号墳	円墳	14×—			昭和57年度調査　消滅	2-197
30	30号墳					不明瞭	2-198
31	31号墳					不明瞭	2-199
32	32号墳					不明瞭	2-200
33	33号墳					不明瞭	2-201
34	34号墳	円墳	8 ×0.5				2-202
35	35号墳	円墳	15×1.0				2-203
36	36号墳	円墳	12×1.5				2-204
37	37号墳	円墳	12×0.5			削平	
38	38号墳	円墳	12×2.0				
39	39号墳	円墳	15×1.0			一部流失	
40	40号墳	円墳	6.5×0.8	直葬	須恵器壺 杯身 有蓋壺	平成11年度調査　本報告	
41	41号墳	円墳	8.3×1.8	石棺	鉄鏃 刀子	平成12年度調査　本報告	
42	42号墳	円墳	9.7×1.8	直葬	須恵器甕 土師器高杯 鉄刀 鉄鏃 玉	平成12年度調査　本報告	
43	43号墳	円墳	10×1.0				
44	44号墳	円墳	15×1.2				
45	45号墳	円墳	18×1.5				
46	46号墳	円墳	10×1.0				
47	47号墳	円墳	12×1.0				

1　円護寺５号墳（第３～７・９～14図、図版２～４・19～21）

位置と現状

丘陵先端部の標高54.5～57.5mに立地している。丘陵の前面には平野部が開け、この平野部との比高差は約20mあまりを測る。５号墳の上位には６、７号墳が連続して築かれており支群を形成している。

調査前の観察では、西側と南側に流失の痕跡が認められたが、尾根の上位側には周溝とみられる凹みがはっきり認められた。墳丘も西裾から3.0m以上のしっかりした高さが観察され、墳頂部には円形に近い平坦部が遺存していた。

墳丘

厚さ10～20cmの表土下で墳丘面を検出した。西側および南側の墳丘裾部はかなり流失していたが、墳頂部は比較的良好に遺存している。墳頂部の標高は57.4mである。墳丘規模は南西裾から北東裾で径11.4m、高さは南西裾部から墳頂部まで3.2mを測る。墳丘裾部が一部流失しているが、残存状況から円墳と思われる。

墳丘の築造は、尾根の上位側を廻る周溝の掘削と、盛土によって行われている。周溝の掘削は丘陵の上方側で大きく行われ、幅３m近くにわたって丘陵斜面を削りだしている。周溝底から周溝外縁まで1.5m、墳頂部まで1.2mを測る。盛土は墳頂部の南西で厚さ1.1mあまりが認められた。第５図の３～10層、13～18層が墳丘築造時に盛られた土と考えられ、丘陵斜面の傾斜変換地点に形成された平坦部を有効に利用して墳丘を築造している様子をうかがうことができる。

埋葬施設（第６・７図、図版３・４）

主体部は墳頂部ほぼ中央から石棺１基を検出した。石棺の蓋石は完存している。蓋石は、長さ120～139cm、幅45～91cm、厚さ10～20cmの大型の板石を３石配し、北西小口側は小ぶりの石材で塞いでいるが、各石材の間には８cm内外の隙間が認められ、動かされた可能性も考えられる。棺内は流入土が上面まで堆積していた。

石棺は主軸をN-33°-Wにとり、尾根の稜線にほぼ直交している。石棺規模は内法で長さ212cm、幅は北西小口側で72cm、南東小口側90cm、深さ78cmを測る。石棺の幅にはっきりした差異が認められ、南東側が幅を増している。

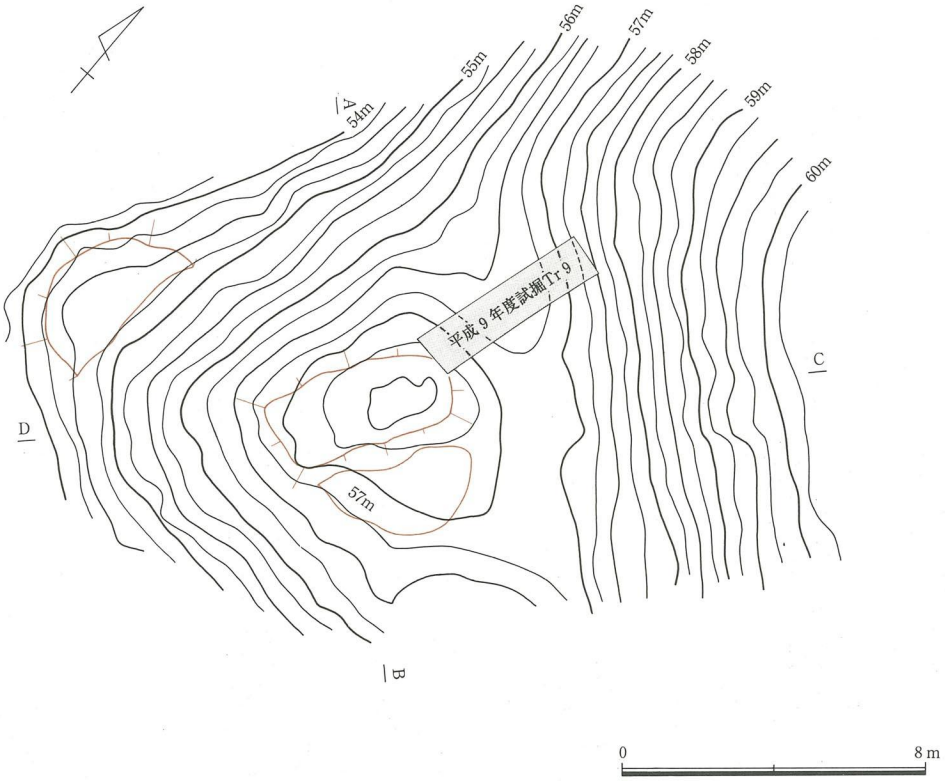
石棺材には主に扁平な自然石を用いている。石棺の組合せ方を見ると、まず両小口に安定感のある大型の石材を立て、この小口板を挟み込むように側石を配している。側石は、北東側に６石、南西側で５石を立てて側壁の基部を造り、その後に小型の石材を平積にして石棺の上端を一定に揃えている。

棺床には板石が敷かれている。基本的には床面全体に置かれていたものと思われるが、両小口側の一部で敷石を欠く箇所が認められる。敷石に用いていたとみられる板石が床面の中央よりで見られることから二次的に動かされている可能性が考えられる。床石の設置は、厚さ６～10cm程度の客土（第６図６層）を入れ整地したのちに行われている。

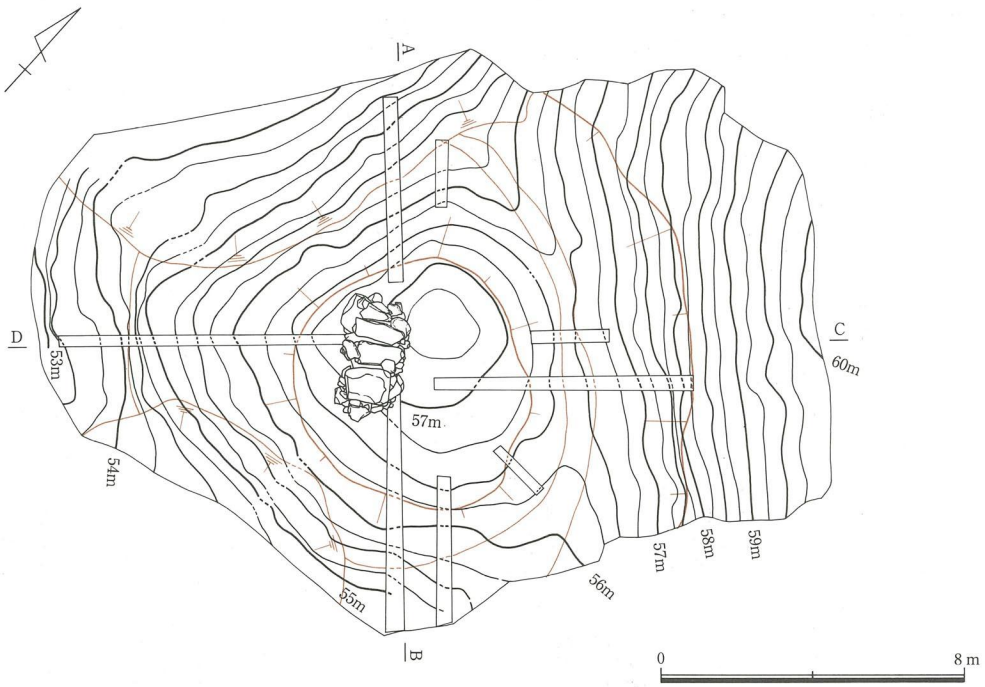
石棺を納める墓壙は検出されなかった。断面観察から石棺の構築方法を見ると、小口板および側石を納める溝状の掘り込み、基部となる石を設置したのち背面に盛土を行って石棺を組み上げていったものと推測される。

遺物は、床面から須恵器蓋杯の蓋（第９、10図１、３～10）、杯身（２、11～17）、長頸壺（18）、瑞（19、20）、提瓶（21）、軽石（22）、刀子（第11図23～27）、鉄鏃（28～37）のほか玉類が35点出土した。玉類の図化はこの内の７点について行い他は表にまとめた。

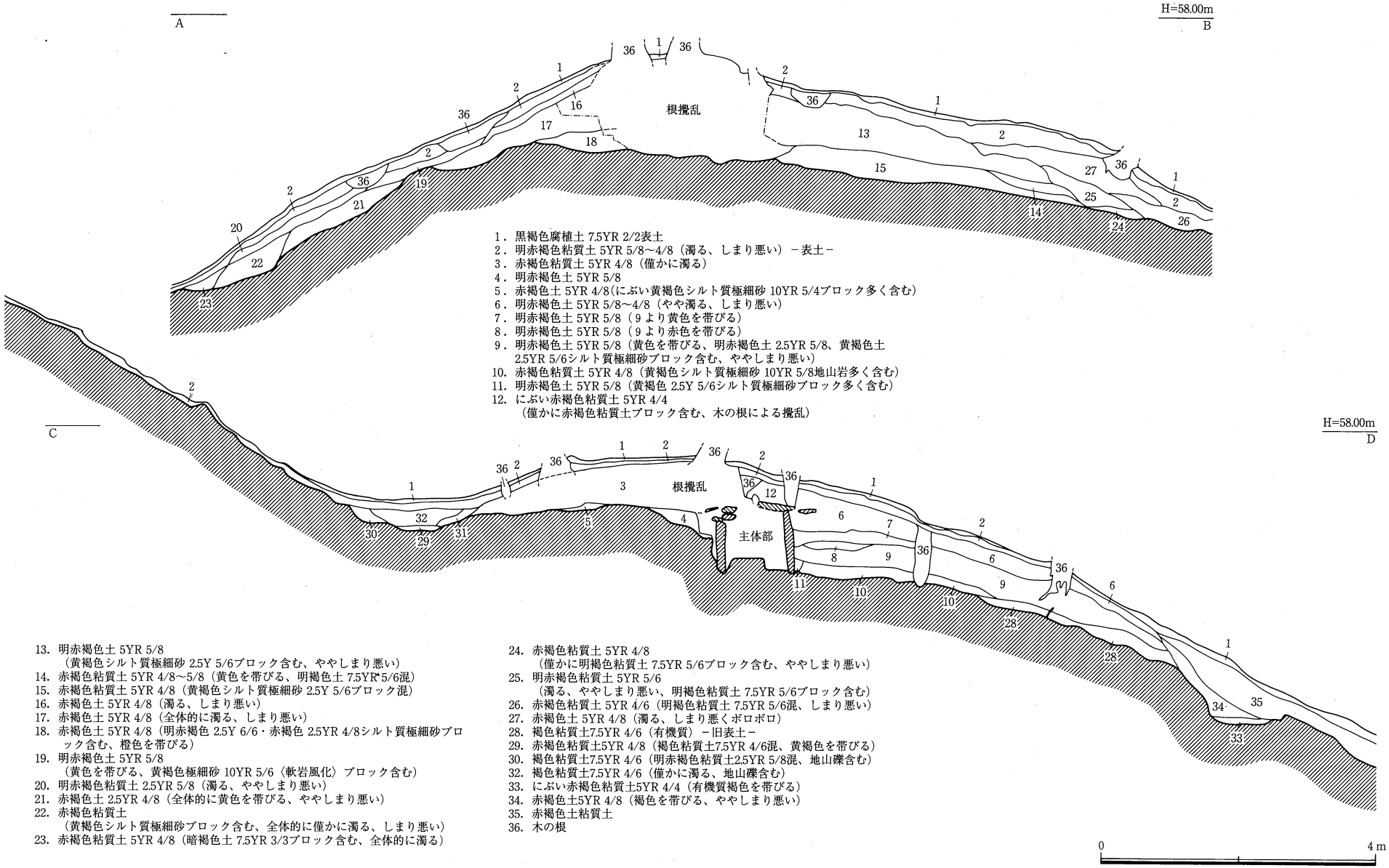
遺物の出土位置は大きく２群に別れ、北西小口側と南東小口側にまとまっている。前者の一群は石棺の隅にかたづけられた様子がうかがわれ、蓋杯の（４～６、12、13、16、17）、長頸壺（18）、瑞（19、20）、提瓶（21）、軽石（22）、刀子（23）が位置している。また、後者側では蓋杯の（１～３、７～11、14、15）、刀子（24、25、27）、鉄鏃（28～34）や玉類が検出された。蓋杯は床面から６cm前後浮くが、その出



第3図　円護寺5号墳 地形実測図

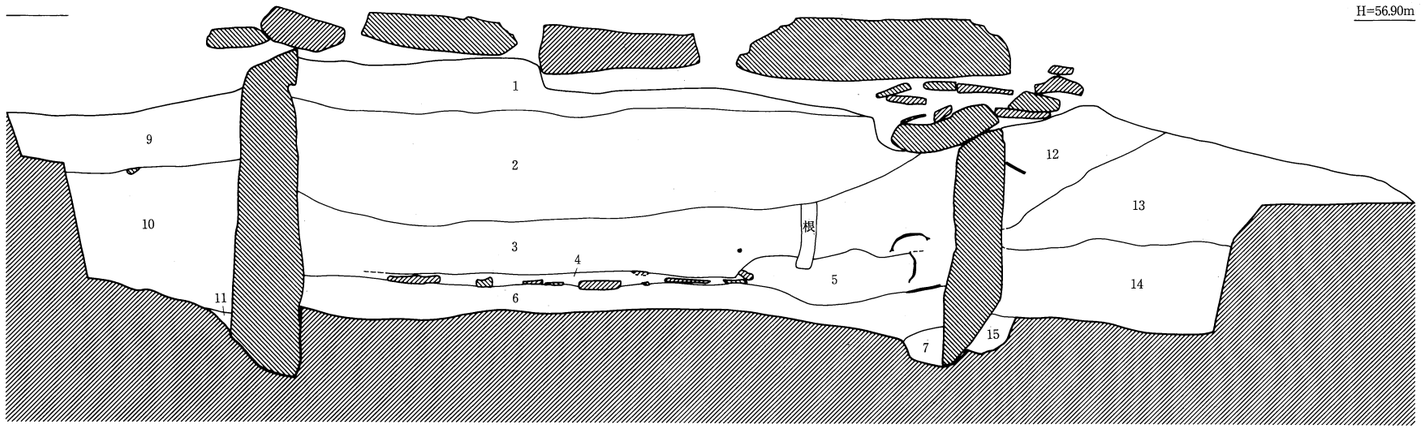


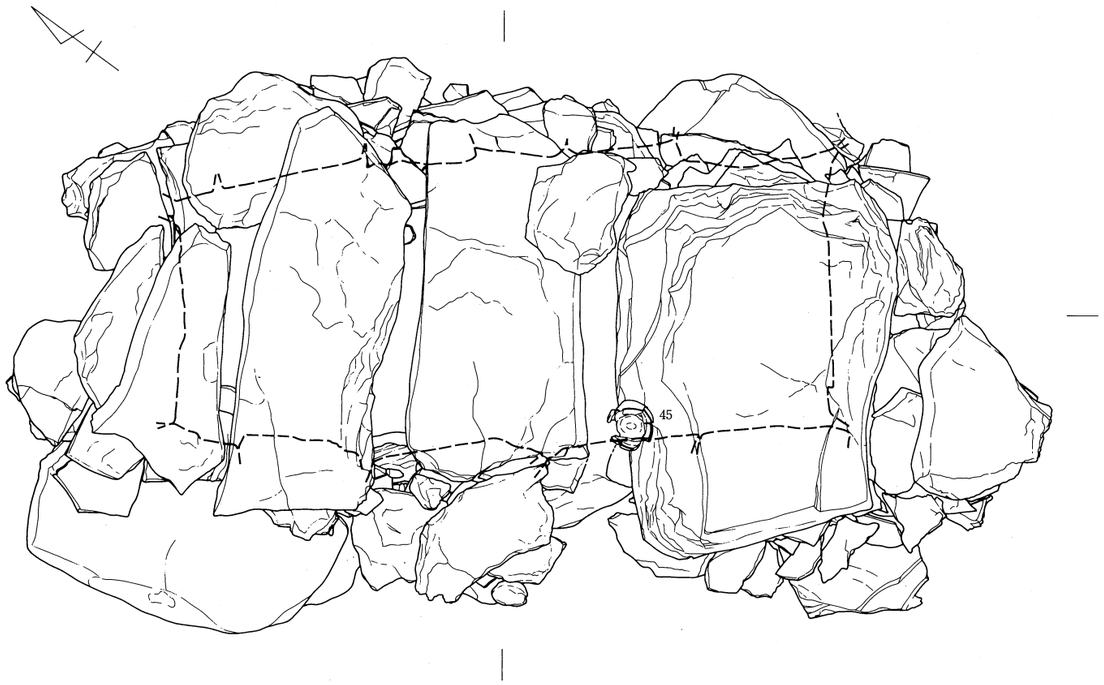
第4図　円護寺5号墳 墳丘遺存図

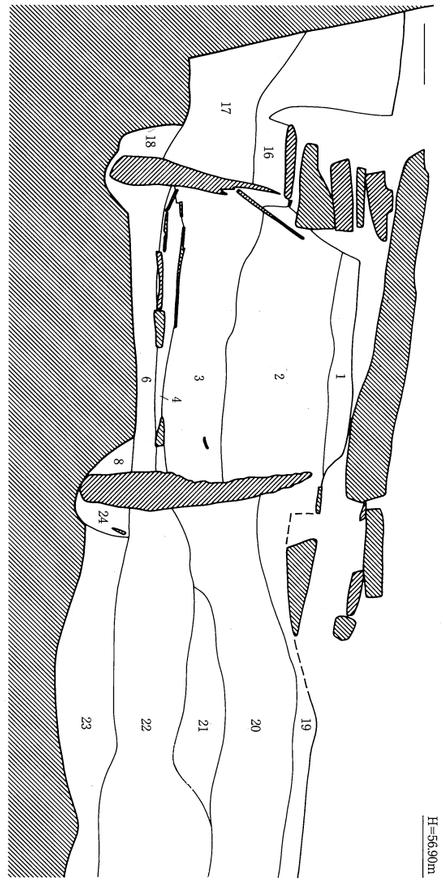


1．黒褐色腐植土 7.5YR 2/2表土
2．明赤褐色粘質土 5YR 5/8～4/8（濁る、しまり悪い）－表土－
3．赤褐色粘質土 5YR 4/8（僅かに濁る）
4．明赤褐色土 5YR 5/8
5．赤褐色土 5YR 4/8(にぶい黄褐色シルト質極細砂 10YR 5/4ブロック多く含む)
6．明赤褐色土 5YR 5/8～4/8（やや濁る、しまり悪い）
7．明赤褐色土 5YR 5/8（9より黄色を帯びる）
8．明赤褐色土 5YR 5/8（9より赤色を帯びる）
9．明赤褐色土 5YR 5/8（黄色を帯びる、明赤褐色土 2.5YR 5/8、黄褐色土 2.5YR 5/6シルト質極細砂ブロック含む、ややしまり悪い）
10．赤褐色粘質土 5YR 4/8（黄褐色シルト質極細砂 10YR 5/8地山岩多く含む）
11．明赤褐色土 5YR 5/8（黄褐色 2.5Y 5/6シルト質極細砂ブロック多く含む）
12．にぶい赤褐色粘質土 5YR 4/4
（僅かに赤褐色粘質土ブロック含む、木の根による攪乱）
13．明赤褐色土 5YR 5/8
（黄褐色シルト質極細砂 2.5Y 5/6ブロック含む、ややしまり悪い）
14．赤褐色粘質土 5YR 4/8～5/8（黄色を帯びる、明褐色土 7.5YR 5/6混）
15．赤褐色粘質土 5YR 4/8（黄褐色シルト質極細砂 2.5Y 5/6ブロック混）
16．赤褐色土 5YR 4/8（濁る、しまり悪い）
17．赤褐色土 5YR 4/8（全体的に濁る、しまり悪い）
18．赤褐色土 5YR 4/8（明赤褐色 2.5Y 6/6・赤褐色 2.5YR 4/8シルト質極細砂ブロック含む、橙色を帯びる）
19．明赤褐色土 5YR 5/8
（黄色を帯びる、黄褐色極細砂 10YR 5/6〈軟岩風化〉ブロック含む）
20．明赤褐色粘質土 2.5YR 5/8（濁る、ややしまり悪い）
21．赤褐色土 2.5YR 4/8（全体的に黄色を帯びる、ややしまり悪い）
22．赤褐色粘質土
（黄褐色シルト質極細砂ブロック含む、全体的に僅かに濁る、しまり悪い）
23．赤褐色粘質土 5YR 4/8（暗褐色土 7.5YR 3/3ブロック含む、全体的に濁る）
24．赤褐色粘質土 5YR 4/8
（僅かに明褐色粘質土 7.5YR 5/6ブロック含む、ややしまり悪い）
25．明赤褐色粘質土 5YR 5/6
（濁る、ややしまり悪い、明褐色粘質土 7.5YR 5/6ブロック含む）
26．赤褐色粘質土 5YR 4/6（明褐色粘質土 7.5YR 5/6混、しまり悪い）
27．赤褐色土 5YR 4/8（濁る、しまり悪くボロボロ）
28．褐色粘質土7.5YR 4/6（有機質）－旧表土－
29．赤褐色粘質土5YR 4/8（褐色粘質土7.5YR 4/6混、黄褐色を帯びる）
30．褐色粘質土7.5YR 4/6（明赤褐色粘質土2.5YR 5/8混、地山礫含む）
32．褐色粘質土7.5YR 4/6（僅かに濁る、地山礫含む）
33．にぶい赤褐色粘質土5YR 4/4（有機質褐色を帯びる）
34．赤褐色土5YR 4/8（褐色を帯びる、ややしまり悪い）
35．赤褐色土粘質土
36．木の根

第5図　円護寺5号墳 墳丘断面実測図



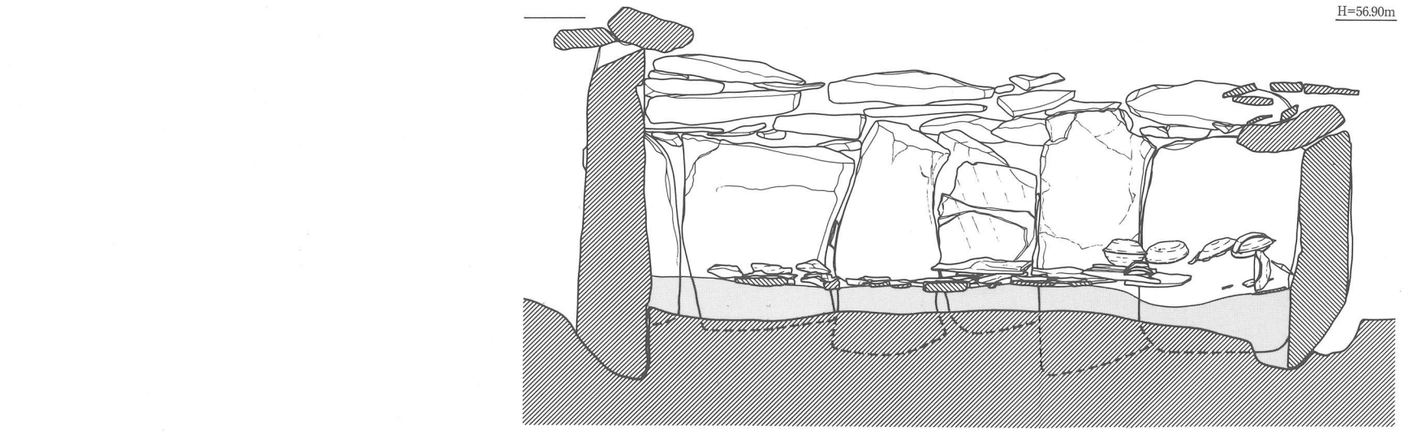


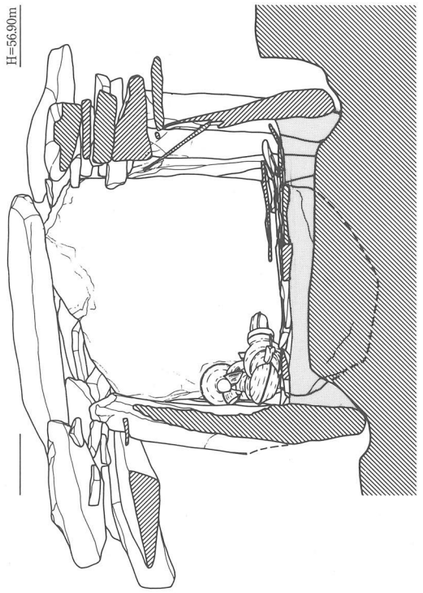


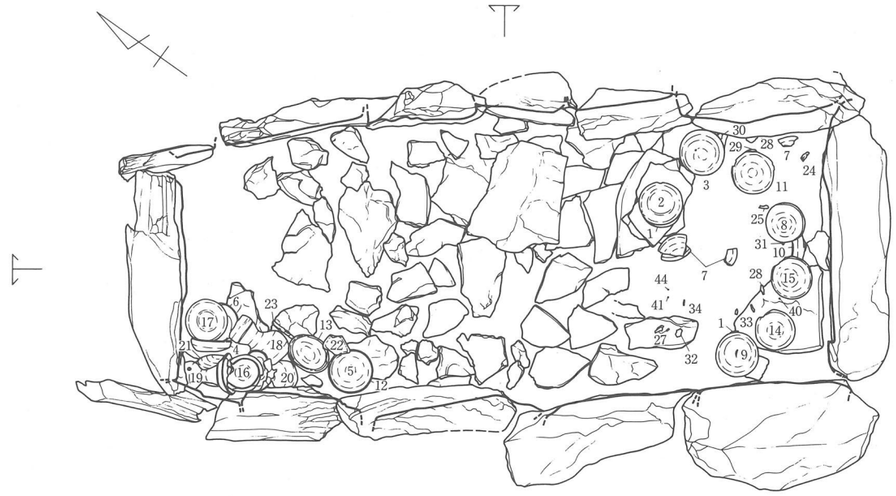
1．赤褐色土 5YR 4/8（黄色を帯びる）
2．明赤褐色土 5YR 5/8（僅かに地山ブロックを含む、しまり悪い）
3．赤褐色粘質土 5YR 4/8（僅かに地山ブロックを含む、赤色を帯びる）
4．明赤褐色土 5YR 5/8
5．明赤褐色土 5YR 5/8
（ごく僅かに地山ブロックを含む、褐色を帯びる、しまり悪い）
6．赤褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
7．赤褐色粘質土 2.5YR 4/8（地山ブロックを含む、黄色を帯びる）
8．明赤褐色土 5YR 5/8（黄褐色 2.5Y 5/6シルト質極細砂ブロックを多く含む）
9．明赤褐色土 5YR 5/8
（明黄褐色シルト質極細砂 2.5Y 7/6ブロックを含む、しまり悪い）
10．赤褐色土 5YR 4/8
（明黄褐色シルト質極細砂 2.5Y 7/6ブロックを含む、しまり悪い）
11．赤褐色土 5YR 4/8（橙色を帯びる）
12．赤褐色粘質土 5YR 4/8（黄色を帯びる）
13．明赤褐色土 5YR 5/8（地山ブロックを多く含む、橙色を帯びる、ややしまり悪い）
14．明赤褐色粘質土 2.5YR 5/8（地山ブロックを多く含む、橙色を帯びる）
15．赤褐色粘質土 2.5YR 4/8（地山ブロックを含む、黄色を帯びる）
16．明赤褐色土 5YR 5/8
17．赤褐色土 5YR 4/8
（にぶい黄褐色シルト質極細砂 10YR 5/4・明赤褐色土 2.5YR 5/8ブロックを含む）
18．赤褐色土 5YR 5/8（黄褐色を帯びる、濁る）
19．明赤褐色土 5YR 5/8～4/8（やや濁る、しまり悪い）
20．明赤褐色土 5YR 5/8（22より黄色を帯びる）
21．明赤褐色土5YR 5/8（22より赤色を帯びる）
22．明赤褐色土 5YR 5/8（黄色を帯びる、明赤褐色土 2.5YR 5/8・黄褐色土 2.5Y 5/6シルト質極細砂ブロックを含む、ややしまり悪い）
23．赤褐色粘質土 5YR 4/8（黄褐色シルト質極細砂 10YR 5/8地山岩を多く含む）
24．明赤褐色土 5YR 5/8（黄褐色 2.5Y 5/6シルト質極細砂ブロックを多く含む）

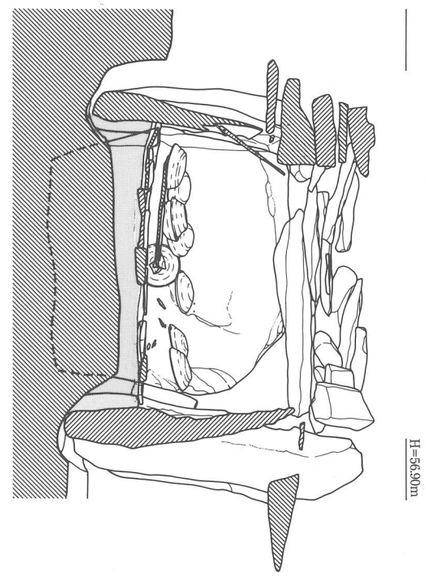
0　1m

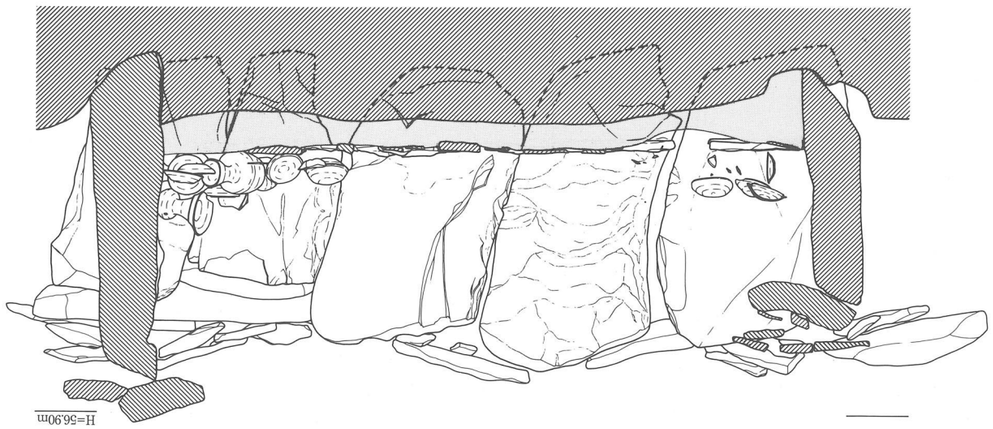
第6図　円護寺5号墳 主体部実測図（1）











0 1m

第 7 図　円護寺 5 号墳 主体部実測図（2）

土状況には伏せて規則的に並べられた様子が見られ、意図的に置かれたものと思われる。床面の中央よりで出土した蓋杯の蓋(1)と杯身(2)は組み合わされた状態で検出された。蓋杯中には土が流入していたが、中から歯牙1点と骨片、鉄鏃の破片2点が出土した。蓋杯内に納めていたものと考えられる。蓋杯の周辺からは刀子と鉄鏃が破損し、散乱する状態で検出された。

玉類は、おおむね南東小口側にあり、総数にして35点が検出された。内訳は丸玉9点、ガラス製小玉26点である。図化はこの内の丸玉1(第12図38)と小玉6(39～44)について行い、他は表にまとめた。丸玉はいずれも土製で、淡灰褐色の色調を呈し、径4.4～5.5㎜、孔径1.2㎜前後を測る。ガラス製小玉は径2.9～4.8㎜を測り、淡青色、青色、青灰色、緑灰色、黄緑色を呈するものが見られる。

その他の出土遺物

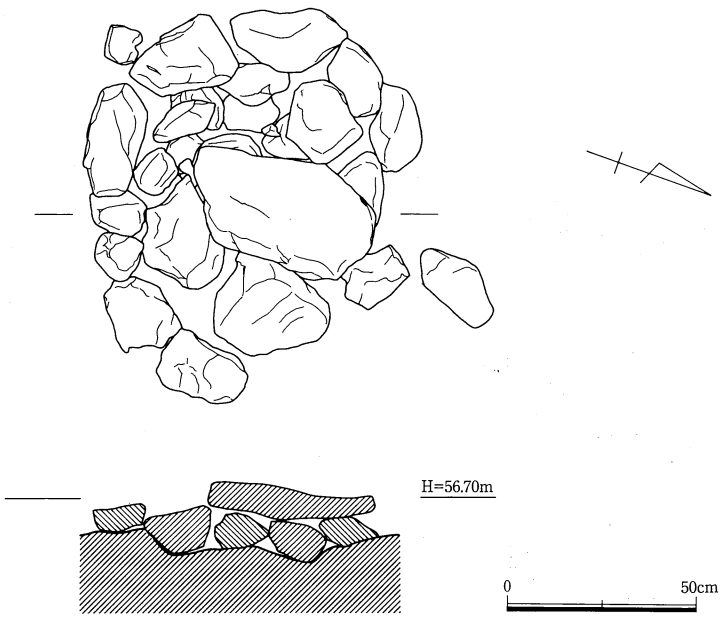
墳頂部から須恵器の高杯(第13図45)、脚部(51)、墳丘盛土内から蓋杯の蓋(46～50)、表土から高杯の杯部(52)と脚部(53)が出土した。高杯(45)は石棺の上位に位置し、石棺を封土で覆ったのちに供献されたものと考えられる。盛土内から出土した蓋はいずれもほぼ完形である。(46)、(47)は南西側の盛土下層に位置し、伏せて並べられた状態で検出された。また、(49)、(50)はそれぞれ南東裾部と南裾部の盛土内から出土している。出土状況から墳丘築造時に置かれた遺物と思われる。

この他、銅銭の寛永通寶(第14図54、55)が表土から検出されている。

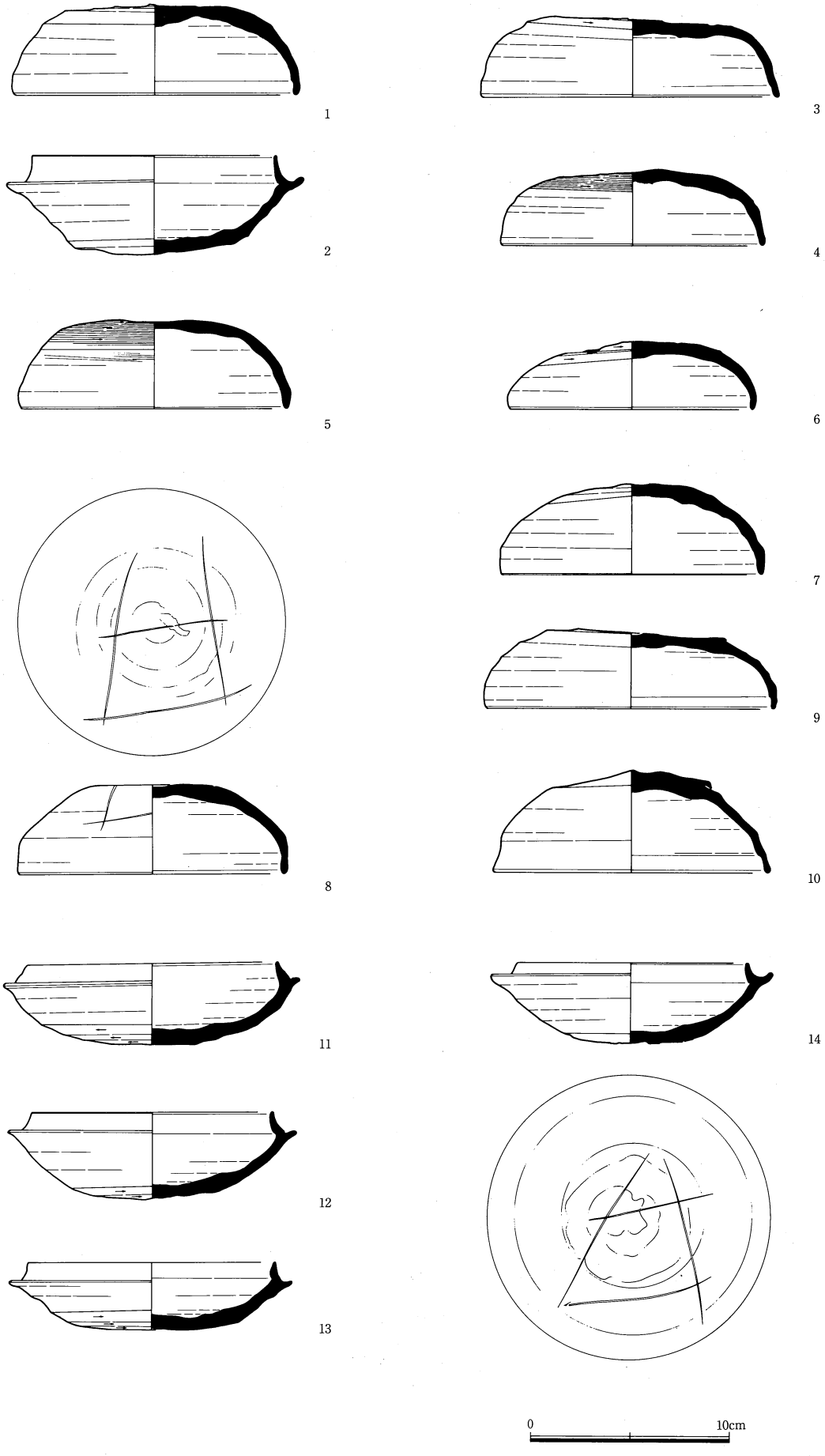
その他の遺構

集石遺構(第8図、図版5)

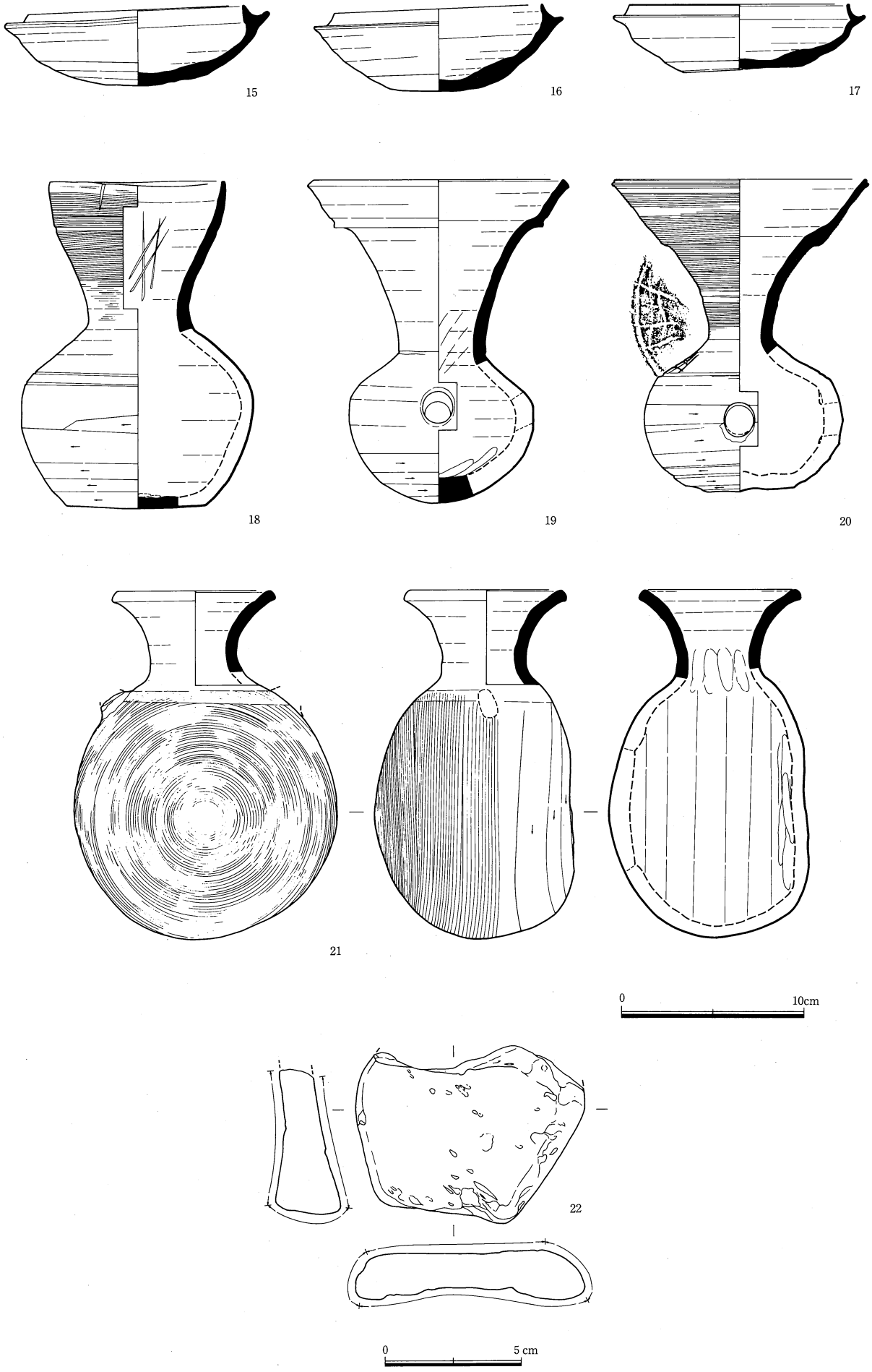
5号墳の墳丘東裾部に位置し、墳丘斜面の傾斜に沿って築かれている。北側の一部を欠くが、遺存部から想定してほぼ円形に組まれていたものと思われる。石組の石材には10～30㎝大の角礫が用いられており、比較的大型の石材を外周に配し、その中に小ぶりの石を並べている。石組の上面は整えられており、その上に厚さ7㎝前後の扁平な石材を重ねている。全体規模は径1.1mあまりを測る。性格や時期などの詳細は不明である。



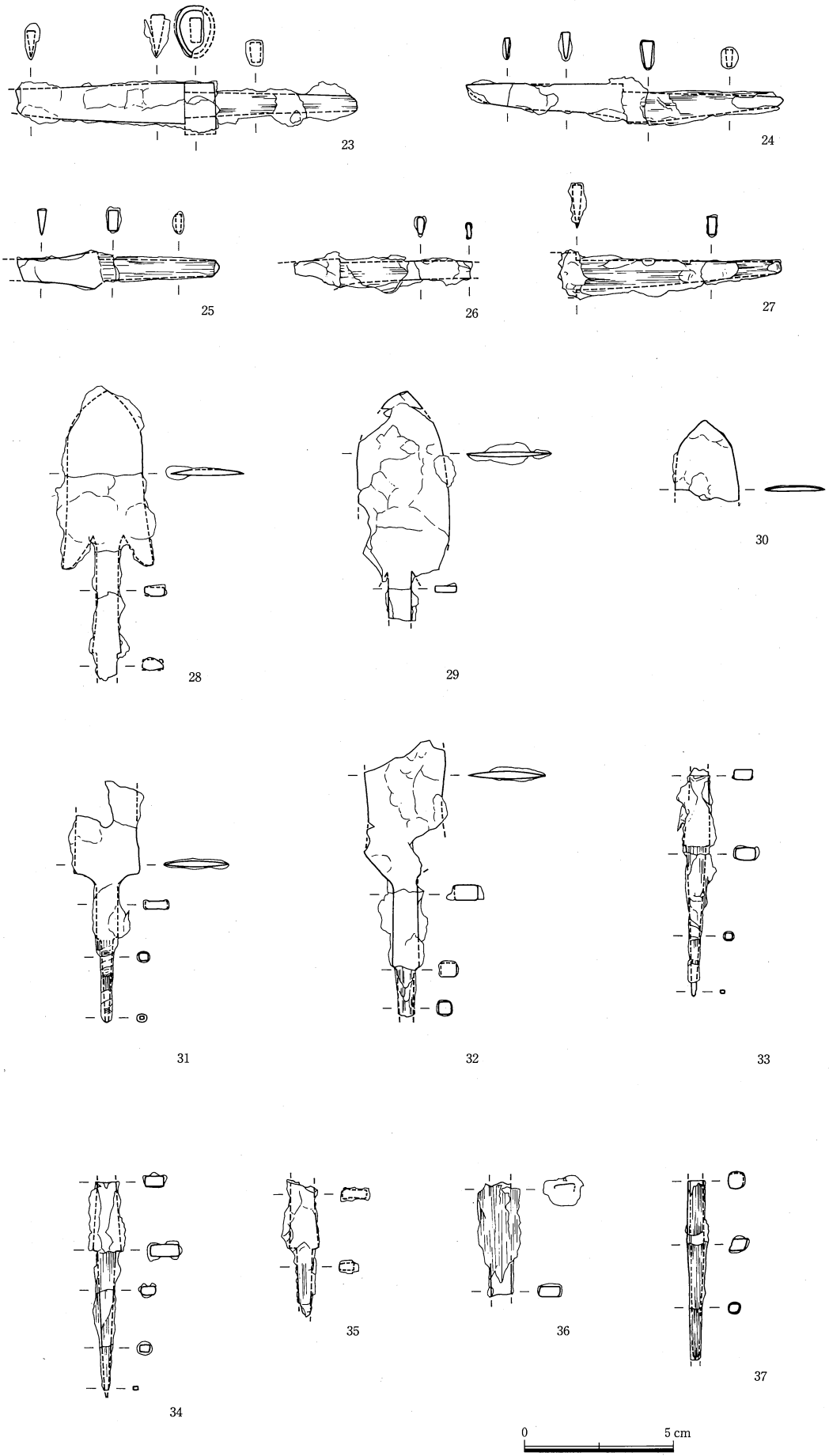
第8図　集石遺構実測図



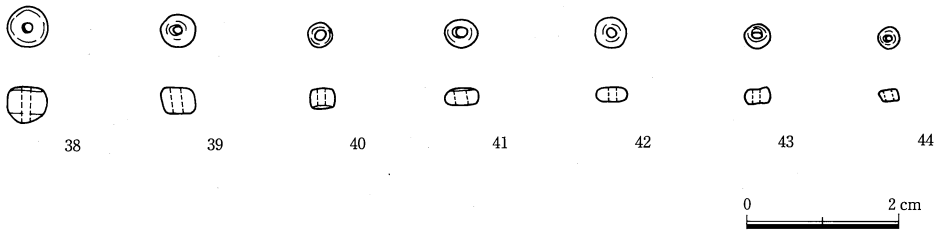
第９図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図（１）



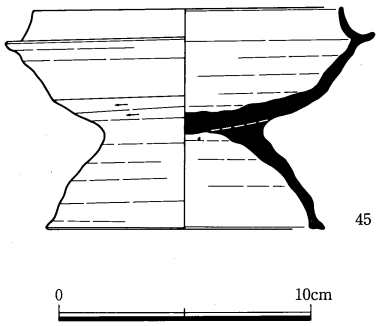
第10図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図（２）



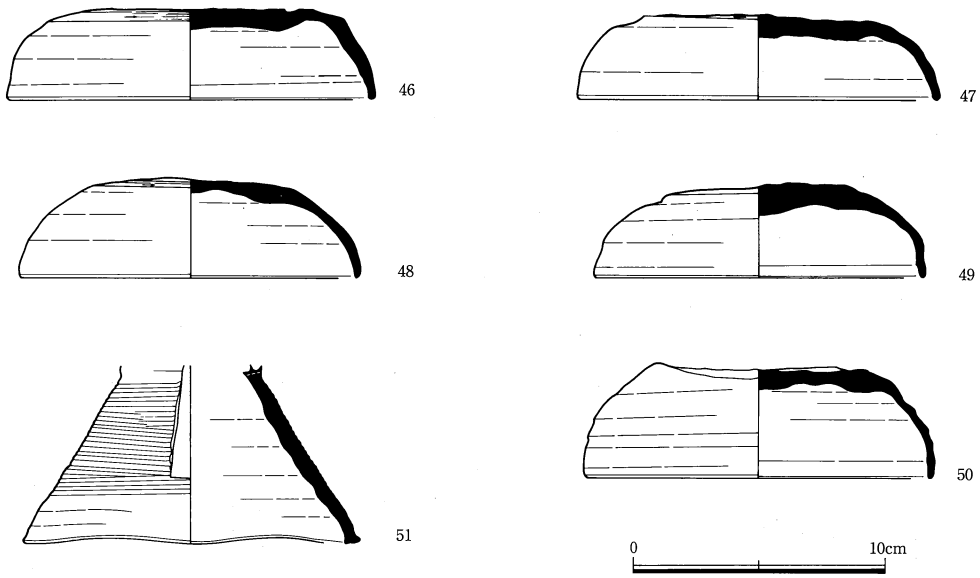
第11図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図（３）



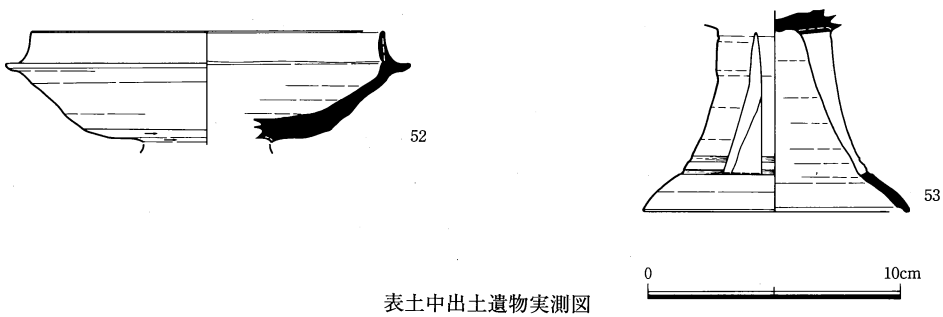
第12図　円護寺５号墳 主体部出土遺物実測図（４）



墳頂部出土遺物実測図

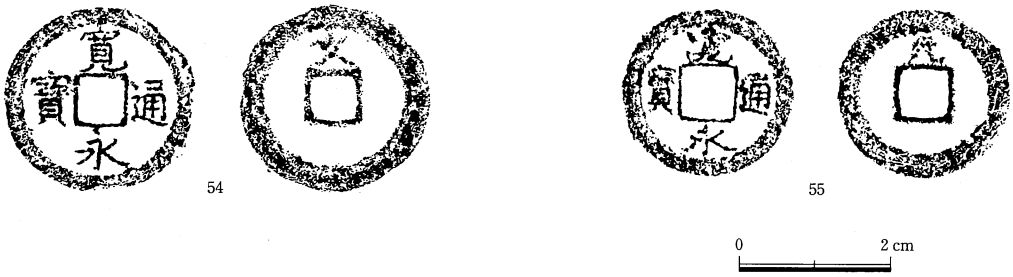


盛土中出土遺物実測図



表土中出土遺物実測図

第13図　円護寺５号墳 出土遺物実測図



第14図　円護寺５号墳 表土中出土遺物拓影

2　円護寺６号墳（第15～19図、図版２・５～７・22）

位置と現状

５号墳の上方約28mあまりに位置し、標高65.5mの丘陵緩斜面に立地している。６号墳の上位には隣接して７号墳が築かれている。

調査前の観察では、西側裾部に流失の跡が見られたが、尾根の上位側には馬蹄形のわずかな凹みが観察され周溝の存在が認められた。墳丘の形状は不明瞭であるものの、墳頂部にはわずかな平坦部が見られ、平坦部上に石材が散在していた。石材には扁平なものが多くみられ、石棺材の可能性が考えられた。

墳丘

厚さ5.0～18cmの表土下で墳丘面を検出した。墳頂部の標高は65.4mである。墳丘は直径7.3mを測る円墳で、遺存高は西裾部から墳頂部まで1.8m前後である。

墳丘の築造は、尾根の上位側をほぼ半周する周溝の掘削と、盛土によって行われている。周溝の掘削は東側で大きく行われており、1.0～1.2m幅の地山加工が見られる。周溝の深さは、東側の周溝底から周溝外縁で70cmあまりである。盛土は墳頂部西側で最大厚40cmが遺存している。墳丘断面第16図にみる２～５層が墳丘築造時の盛土と考えられ、丘陵斜面の傾斜変換地点に形成された平坦地上に盛土を行って墳丘を築造している様子をうかがうことができる。

埋葬施設（第17図、図版６・７・22）

主体部は、表土を除去した段階で墳頂部中央から石棺１基が検出された。石棺の蓋石は、北小口側に１石遺存しているが、他はすでに失われており棺内は土砂で埋没していた。また、石棺の周辺には棺材と見られる石材が散乱しており、石棺が撹乱を受けている状況がうかがわれた。

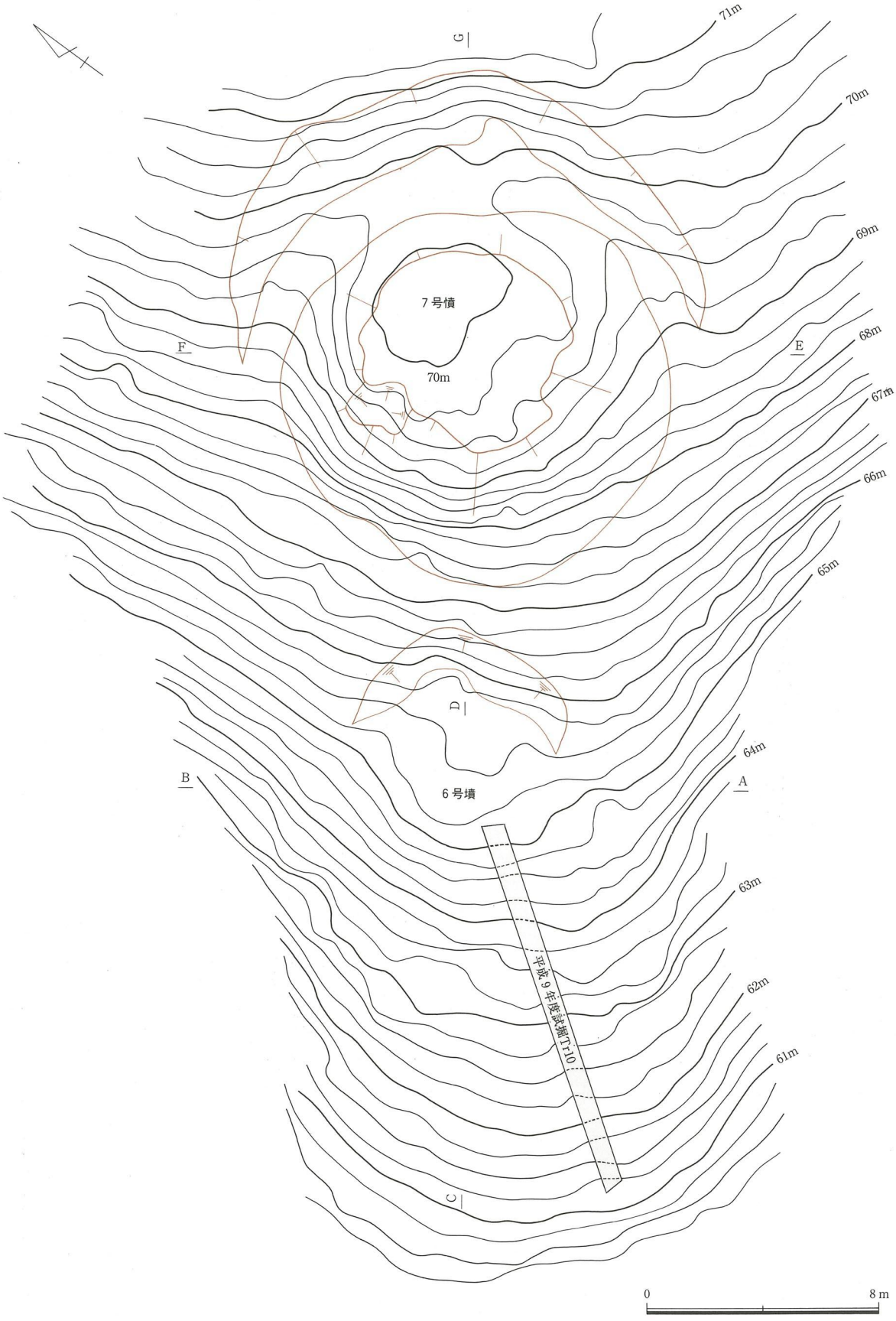
石棺は主軸をN-24°-Wにとり、尾根の稜線にほぼ直交している。石棺規模は内法で長さ122cm、幅は北側小口32cm、南側小口側で43cm、深さは33cmである。石棺の幅にはっきりした差異が認められ、南側が幅を増している。南側小口石の直下には転用枕と考えられる須恵器蓋杯が置かれており、頭位は棺幅の広い南側であったことがわかる。

石棺材にはいずれも扁平な自然石を用いている。石棺の組合せ方を見ると、まず両小口に長さ50～53cm、幅30～43cm、厚さ10cm前後の石材を用い、この小口板を挟み込むように側石を配している。側石は東側で４石、西側で５石を立て、側壁の基部を造ったのち小型の石材を平積にしている。棺床は、厚さ８cm前後にわたって墓壙底に土を敷き平坦に整えられている。

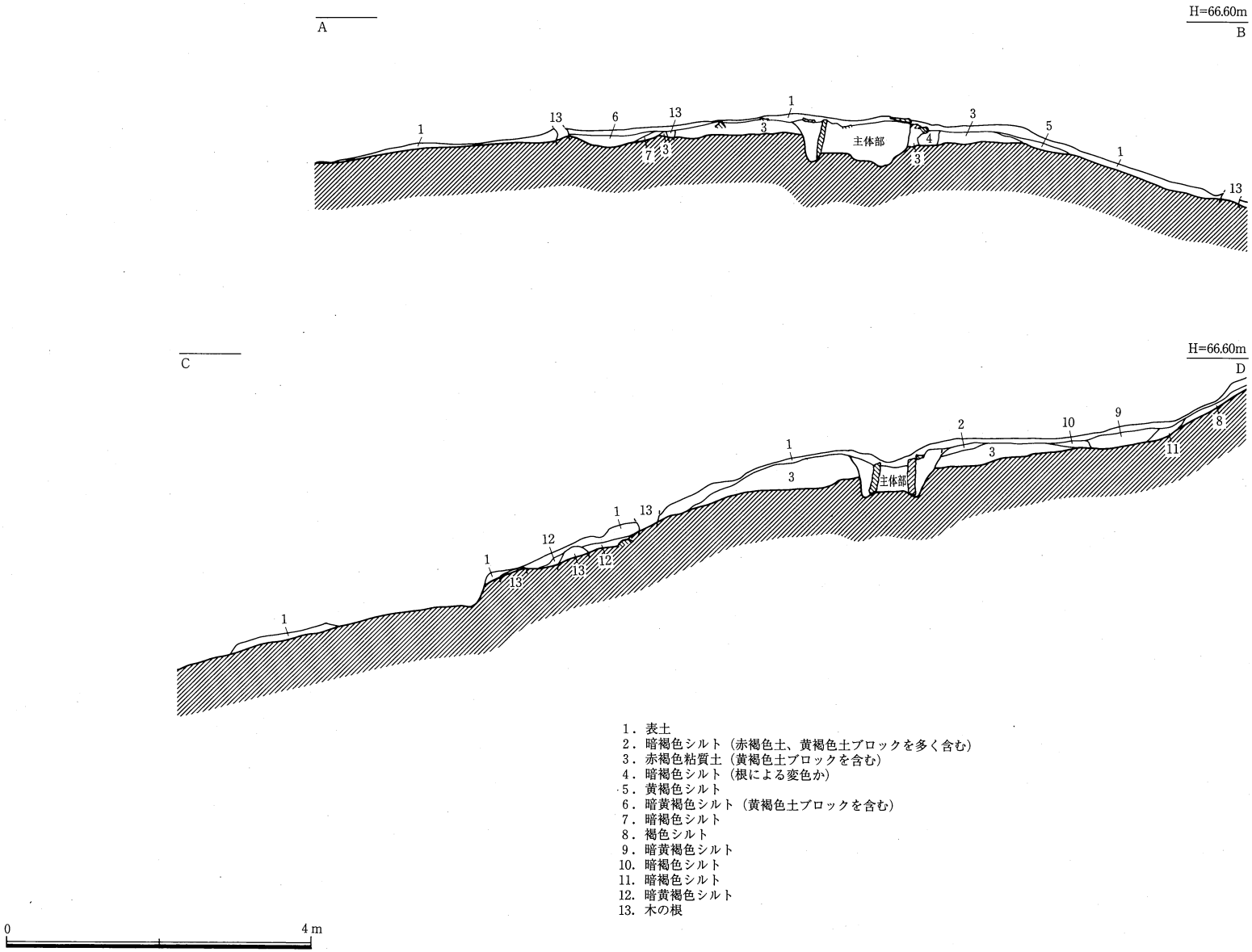
石棺を納めた墓壙は、隅丸長方形の平面形をなし長さ195cm、幅95～101cm、深さ49cmを測る。墓壙底には小口および側板を設置するための溝状の掘り込みが行われている。

遺物は、石棺内から須恵器蓋杯の蓋（第18図１）、杯身（２）が出土した。（１）、（２）はともに石棺の南小口石の直下に位置し、伏せた状態で並べられている。出土状況から被葬者の枕として転用されたものと考えられる。

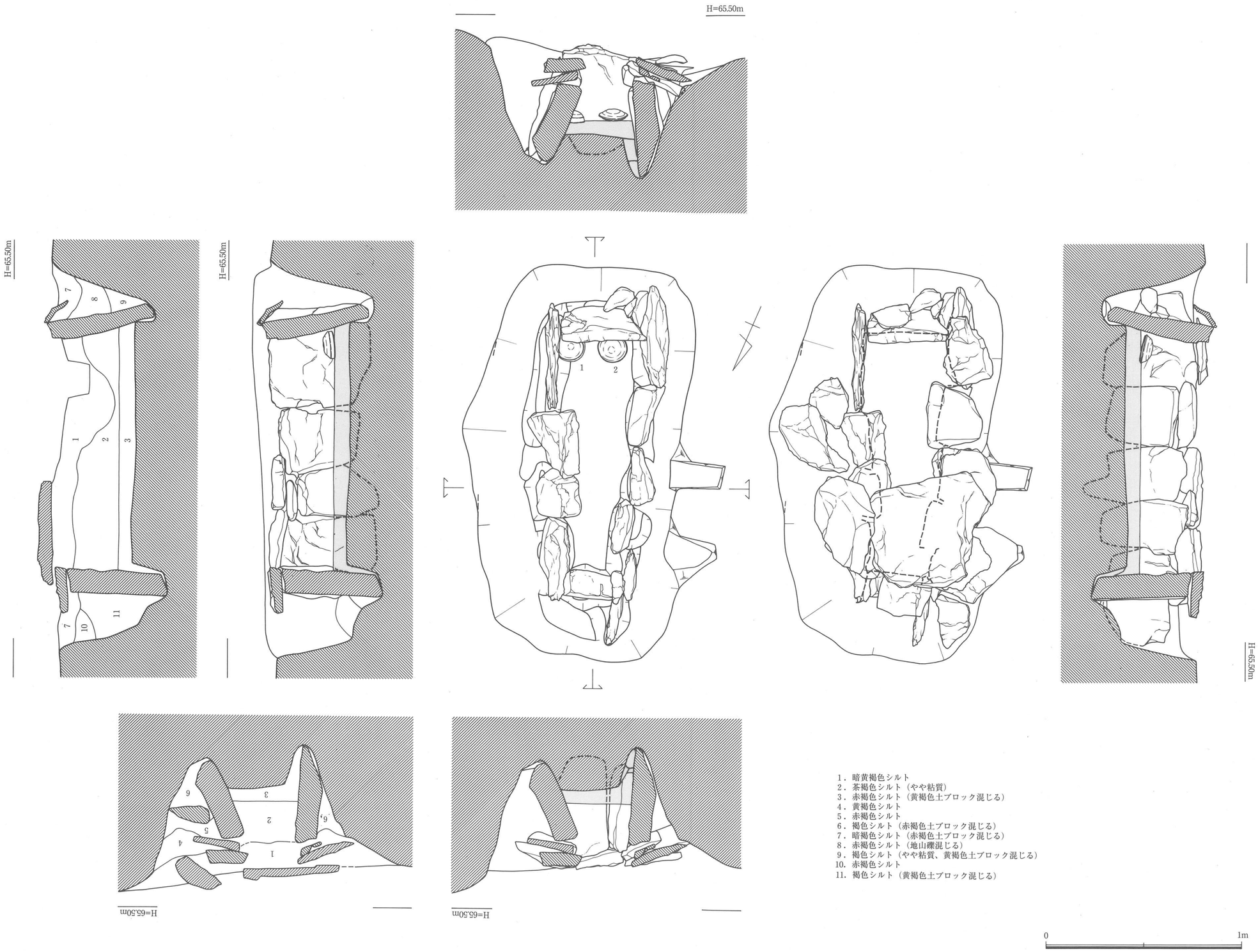
墳丘から遺物は出土しなかった。



第15図　円護寺6・7号墳 地形実測図



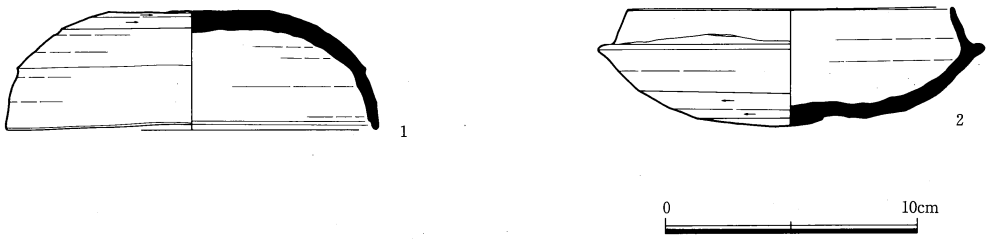
第16図　円護寺６号墳　墳丘断面実測図



1．暗黄褐色シルト
2．茶褐色シルト（やや粘質）
3．赤褐色シルト（黄褐色土ブロック混じる）
4．黄褐色シルト
5．赤褐色シルト
6．褐色シルト（赤褐色土ブロック混じる）
7．暗褐色シルト（赤褐色土ブロック混じる）
8．赤褐色シルト（地山礫混じる）
9．褐色シルト（やや粘質、黄褐色土ブロック混じる）
10．赤褐色シルト
11．褐色シルト（黄褐色土ブロック混じる）

0 1m

第17図　円護寺６号墳 主体部実測図



第18図　円護寺６号墳 主体部出土遺物実測図

3　円護寺７号墳（第15・19～23図、図版２・５・８・９）

位置と現状

６号墳の上方約４mに隣接し、標高67～70.75mの丘陵緩斜面に立地している。北西側約35mには42号墳が位置している。

調査前の観察では、尾根の上位側を廻る周溝の痕跡がはっきり認められ、墳頂部には円形に近い平坦部が見られた。墳丘の遺存状態も良好で西裾から2.5m前後の高さが観察された。

墳丘

厚さ10～15cm前後の表土下で墳丘面と埋没した周溝の痕跡を検出した。周溝部には厚さ20～30cmあまりの埋土が堆積していた。墳丘規模は南北径13.1m、東西径13.6mで、墳丘遺存高は西裾部から墳頂部まで3.0m、東側周溝底から最大0.75mである。墳形は真円に近い円墳である。墳頂部の標高は70m内外を測る。

墳丘の築造は、尾根の上位側を廻る周溝の掘削と、盛土によって行われている。周溝は墳丘をほぼ半周し、南から北西側の墳裾部はわずかな地山の削り出しによって造りだしている。周溝の幅は東側で最大3.3m、深さは東側の周溝底から周溝外縁で１m前後を測る。盛土は、墳頂部の西側でしっかり行われており最大厚１mあまりが確認された。第21図の２～18、30層が盛土と考えられ、墳頂部西側から斜面にかけて何層にも盛土を積み上げて墳丘を築いている様子を見ることができる。盛土の下層には旧表土と思われる暗い黄褐色土がほぼ全体で認められ、丘陵緩斜面に多量の盛土を行うことによって墳丘を築造している様子がわかる。

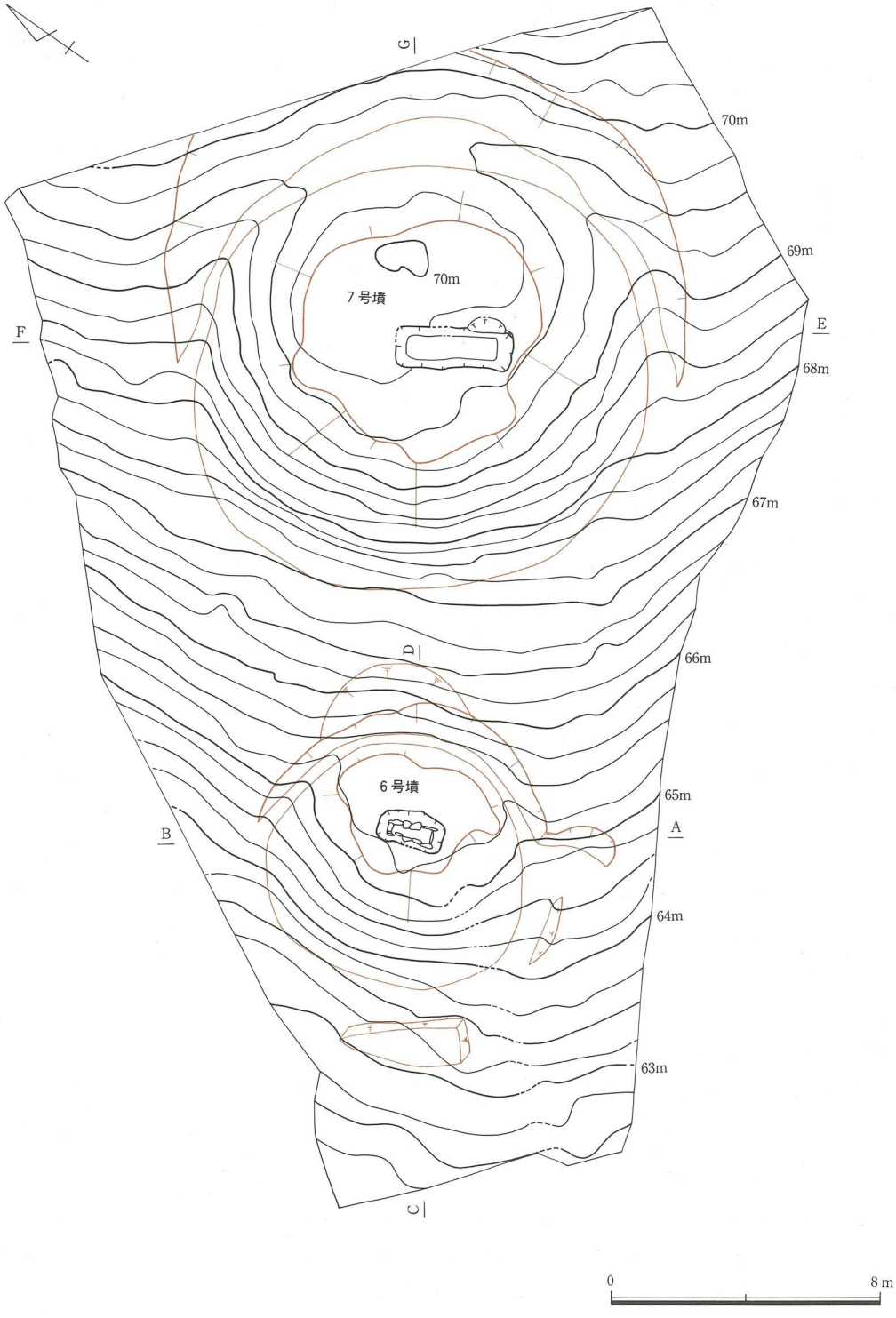
埋葬施設（第20図、図版９）

主体部は、墳頂部中央のやや南よりから墓壙１基が検出された。墓壙の南東側は撹乱穴によって切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸をN-33°-Wにとる。主体部の主軸は尾根の稜線にほぼ直交している。墓壙の上面規模は長さ350cm、幅112～120cm、底面は長さ266cm、幅67cm前後で、深さは63cmを測る。墓壙の埋土状況から、墓壙内には木棺が納められていたことが推測される。第20図の10～14層、17～19層、21、22層が棺の裏込土とみられる。また、墓壙の北隅の壁際から10～35cm大の角礫が列状に検出されたが、これらについても棺の裏込に用いられた石材と考えられる。木棺の大きさは、長さ204cm、幅40cm内外と推定される。主体部内から遺物は出土しなかった。

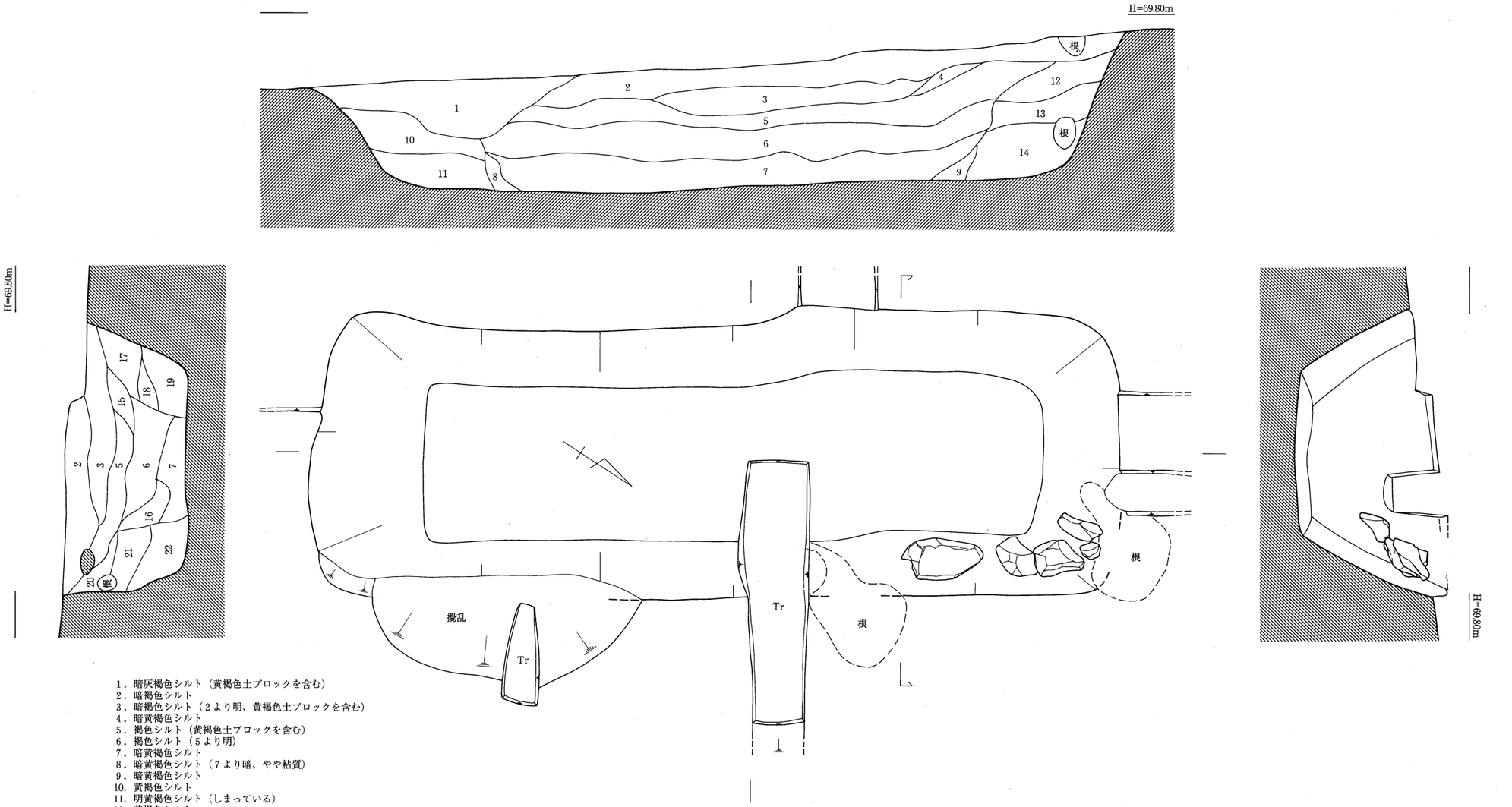
その他の出土遺物

主体部から北西へ50cmの墳丘盛土中（第21図３層）から須恵器蓋杯の杯身（第22図１、２）が検出された。（１）は口縁部を上に、（２）は口縁部を下に向けて並列している。墳丘築造時に置かれたものと考えられる。杯身（３）は墓壙南東部を切る撹乱穴の埋土（第20図１層）から破片状態で出土している。

この他、表土中から寛永通寶（第23図４）が出土した。（４）の背面「元」の文字が入る。

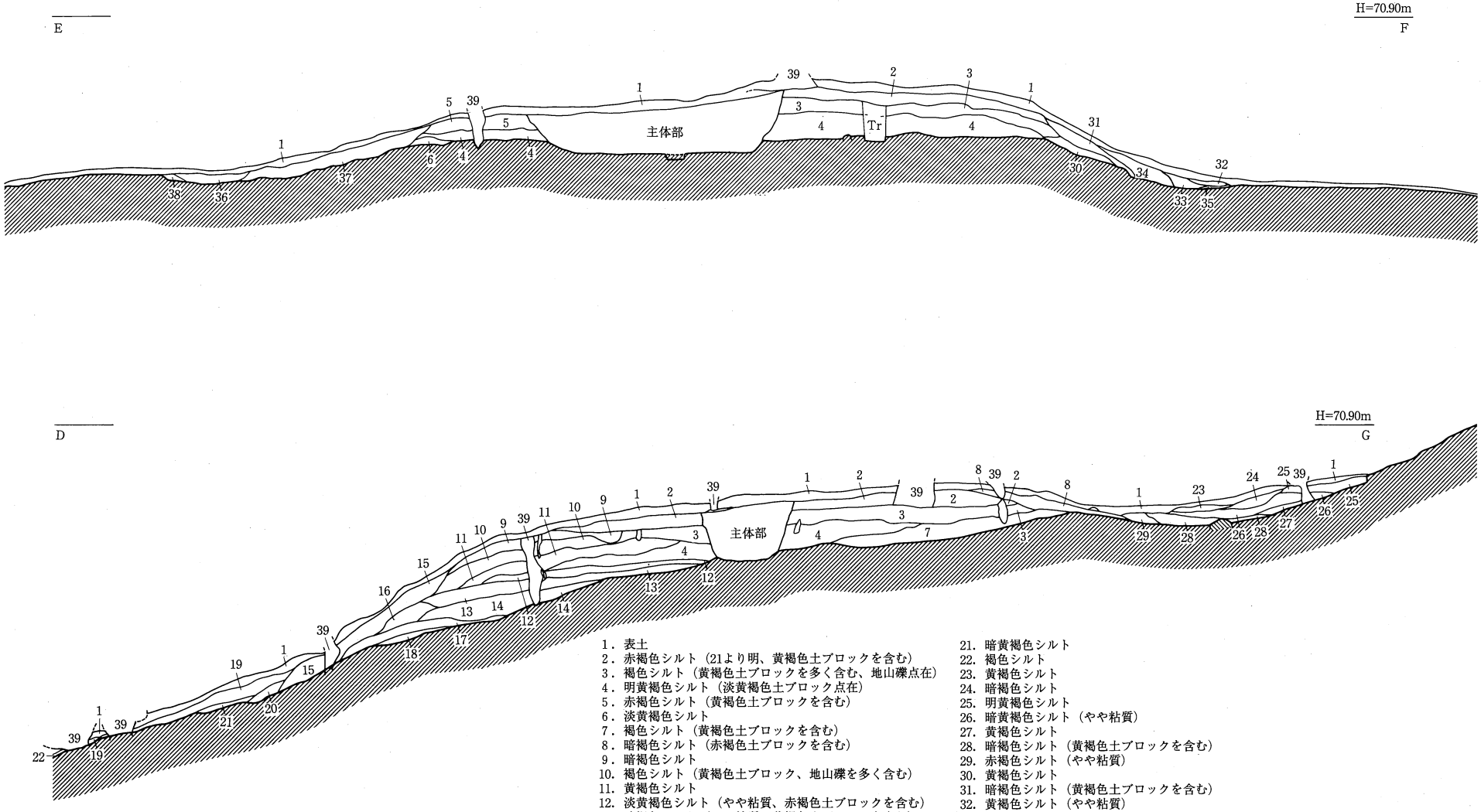


第19図　円護寺6・7号墳 墳丘遺存図



1．暗灰褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
2．暗褐色シルト
3．暗褐色シルト（2より明、黄褐色土ブロックを含む）
4．暗黄褐色シルト
5．褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
6．褐色シルト（5より明）
7．暗黄褐色シルト
8．暗黄褐色シルト（7より暗、やや粘質）
9．暗黄褐色シルト
10．黄褐色シルト
11．明黄褐色シルト（しまっている）
12．黄褐色シルト
13．暗褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
14．明黄褐色シルト
15．褐色シルト（やや粘質、5より明）
16．黄褐色シルト（やや粘質）
17．暗褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
18．黄褐色シルト
19．暗黄褐色シルト（やや粘質、淡黄褐色土ブロックを含む）
20．茶褐色シルト
21．明黄褐色シルト
22．黄褐色シルト（やや粘質、淡黄褐色土ブロックを含む、しまっている）

第20図　円護寺7号墳 主体部実測図



1．表土
2．赤褐色シルト（21より明、黄褐色土ブロックを含む）
3．褐色シルト（黄褐色土ブロックを多く含む、地山礫点在）
4．明黄褐色シルト（淡黄褐色土ブロック点在）
5．赤褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
6．淡黄褐色シルト
7．褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
8．暗褐色シルト（赤褐色土ブロックを含む）
9．暗褐色シルト
10．褐色シルト（黄褐色土ブロック、地山礫を多く含む）
11．黄褐色シルト
12．淡黄褐色シルト（やや粘質、赤褐色土ブロックを含む）
13．暗褐色シルト（やや粘質、黄褐色土ブロックを含む）
14．暗黄褐色シルト（やや粘質、明黄褐色土ブロックを含む）
15．暗褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
16．褐色シルト（赤褐色土、黄褐色土ブロックを多く含む）
17．赤褐色シルト（やや粘質、暗黄褐色土ブロックを含む）
18．黄褐色シルト
19．暗褐色シルト
20．黄褐色シルト
21．暗黄褐色シルト
22．褐色シルト
23．黄褐色シルト
24．暗褐色シルト
25．明黄褐色シルト
26．暗黄褐色シルト（やや粘質）
27．黄褐色シルト
28．暗褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
29．赤褐色シルト（やや粘質）
30．黄褐色シルト
31．暗褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）
32．黄褐色シルト（やや粘質）
33．暗黄褐色粘質土
34．暗褐色シルト（やや粘質）
35．暗褐色シルト
36．暗黄褐色シルト（やや粘質）
37．黄褐色シルト（地山の礫を含む）
38．褐色シルト
39．木の根

0　4 m

第21図　円護寺７号墳　墳丘断面実測図